

月報

2015 年 11 月号

シンガポール日本商工会議所

MCI(P) NO. 001/03/2015

Japanese Chamber of Commerce & Industry, Singapore

Website: <http://www.jcci.org.sg>





ジャパングリーンメディカルグループ
シンガポール・ロンドン・上海・倉敷

毎日笑顔の 海外生活をサポート



海外生活をサポートする総合医療センター

ジャパン グリーン クリニック

外来診察



予防接種



健康診断・医療検査



理学療法



肩痛・腰痛・足痛
スポーツ障害・リハビリ等に

医療相談



生活習慣病・禁煙・アレルギー
感染症・渡航医療・他

ジャパングリーンクリニック

総合診療の
オーチャード本院

診療科目

外来診察 (小児科・内科・外科・耳鼻咽喉科・婦人科*・他一般), 予防接種*, 乳幼児健診*
医療検査*, 健康診断*, 理学療法* (疼痛治療・リハビリ等), 各種医療相談 (アレルギー*・禁煙*・他)

受付時間 月～金 9:00～12:00,
14:00～17:30
土 9:00～12:00
(日・祝 休診)

予約 一般診察は予約不要です。
*印は要予約。

所在地 290 Orchard Road
#10-01 Paragon
Singapore 238859

電話 6734-8871

ファックス 6733-1213

Eメール

reception@japan-green.com.sg

- ◆ MRTオーチャード駅より徒歩10分
- ◆ エレベーターは、1階Tower Lift Lobby1をご利用ください
- ◆ 主要各科医師が在籍し検査機器も揃えた総合クリニックです



パラゴン



健康診断ロビー



ジャパングリーンクリニック シティ分院

オフィス街の
身近なクリニック

診療科目

外来診察 (内科・一般), 予防接種, 理学療法 (疼痛治療・リハビリ等), 健康診断, 各種医療相談 (アレルギー・禁煙・他)

受付時間 月～金 9:00～12:30,
14:30～17:30
(土・日・祝 休診)

予約 ご予約をお願い致します。

所在地 1 Raffles Place
#19-02
One Raffles Place
(Tower 1)
Singapore 048616

電話 6532-1788

ファックス 6532-7673

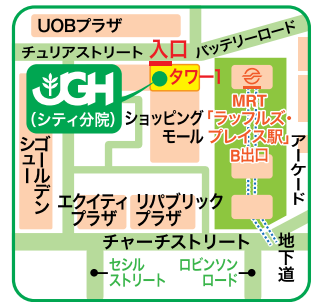
Eメール

citybranch@japan-green.com.sg

- ◆ MRTラッフルズ・プレイス駅B出口至近
- ◆ オフィスタワー入口はChulia Street側 (UOBプラザ前) です
- ◆ お越しの際はIDカード (EP等) をご持参ください
- ◆ 待ち時間を最小限にする予約制を採用



ワン・ラッフルズ・プレイス



歯科はJGHデンタルクリニック(本院内) Tel: 6235 7747

www.japan-green.com.sg

月報

2015

Nov

<特集>

- **SG50 The Project of National Gallery Singapore** p02
TAKENAKA CORPORATION Singapore Office
吉田 光夫
- **アジア海賊対策地域協力協定情報センターと
最近のアジア周辺海域における海賊事案の発生状況について** p09
ReCAAP Information Sharing Centre
三嶋 舟司
- **進化する認証セキュリティ** p14
Cyber Secure Asia
宮本 繁人
- **シンガポールにおけるM&Aについての考察** p17
Amidas Partners Asia Pacific Pte Ltd
伏田 浩俊

<業界ぶらす1> エネルギー

- **一歩先を行くシンガポールのLNG拠点構想** p28
TOKYO GAS ASIA PTE LTD
山口 晋

<事務局便り>

- 10月の行事報告、11月の予定 p39

月報題字: 麗扇会 青木 麗峰
表紙写真: en world Singapore Pte Ltd 西野雄介
写真タイトル: フラトンベイから見るマリーナベイサンズ

SG50 The Project of National Gallery Singapore

—シンガポール旧市庁舎・旧最高裁判所保存・再生プロジェクト—

TAKENAKA CORPORATION Singapore Office

Deputy General Manager

吉田 光夫



1. はじめに

本年8月9日、建国50周年式典(National Day Parade 2015)が盛大に挙行された。読者の中には、50年の節目のこの式典会場に参加された方、テレビで視聴された方も多いと思う。パダン広場とともに本式典のメイン会場となった、City Hall(以下、旧市庁舎)・Former Supreme Court(以下、旧最高裁判所)の国立美術館への保存・再生プロジェクト(以下、本プロジェクト)について両建物の歴史に触れつつ、プロジェクトの背景・概要、技術的に難易度の高い課題とその克服等について以下に紹介したい。

なお、本稿中に何らかの国家観・歴史観が介在すると解釈される場合は、筆者の私見であり、筆者が所属する組織等を代表するものではない。

【写真①：National Day Parade 2015 全景 出典：Channel News Asia】



【写真②：National Day Parade 2015 旧市庁舎 出典：Channel News Asia】



2. プロジェクトの背景・概要

SG50から遡ること10年、2005年のNational Day Rallyにおいて、リーシェンロン首相により、この国の歴史を象徴する建物である旧市庁舎(1929年竣工)及び旧最高裁判所(1939年竣工)が、国立美術館として保存・再生することが発表された。

また、本プロジェクトは、シンガポール建国50周年の記念事業として企画され、オリジナルの建築表現を保持しながらも、新たに設けられた地下空間、最上階のガラス屋根およびリンクブリッジによって二つの建物を連続させることで、アジア最大規模の国際的アートの殿堂として、また国民に親しまれる文化の象徴として生まれ変わることとなる。

【写真③：National Gallery Singapore 全景完成予想図 出典：National Gallery Singapore】



(1) 背景(文化・芸術の視点から)

本プロジェクトは、シンガポール独立当初の司法・立法・行政機能を集約したシビックエリアと称する地区に位置し、ビクトリアシアター等の歴史的建造物も集積しているエリアである。また、シンガポールの国家戦略上・都市間競争上、世界トップレベル経済環境を構築・維持するとともに、観光立国を標榜している。今後は、国内的に

は、文化・芸術の集積・発信拠点として、対外的には、インバウンド戦略の核となる文化・芸術関連の中心的なプロジェクトである。

次に、保存について言及すると、両建物は1992年に、Preservation of Monuments Board(以下、史跡保存局)により、National Monument(国定史跡/重要文化財)に指定された。本プロジェクトにおける、旧市庁舎及び、旧最高裁判所の建物保存に関する重要条件は、以下の4点であった。

- ① 両建物の外壁の保持(着工から完成まで既存の状態を維持すること)
- ② 旧市庁舎3階に位置する最重要室(City Hall Chamber:詳細は後述)の保持(こちらも着工から完成まで既存の状態を維持すること)
- ③ 両建物の内装・建具の保持・修復
- ④ 旧最高裁判所の外壁彫刻の修復・再生

上記①②は、取り分け、旧市庁舎において技術的に極めて難題であったが、なぜこのような重要条件が設定されたかについて考察したい。

(2) 背景(歴史の視点から—なぜ外壁と最重要室をそのまま残すのか?—)

この重要条件の決定を行ったのは、史跡保存局であるが、当局のミッションは以下のとおり。

PMB was a statutory board of the Ministry of National Development. It is charged to identify monuments that are worthy of preservation based on the criteria that they are of historic, cultural, traditional, archaeological, architectural, artistic or symbolic significance and national importance

(Preservation of Monuments Board ホームページより参照)

これから推測すると、歴史的、文化的、伝統的、考古学的、建築的、芸術的または、象徴的な重要性と国家的重大性により、条件決定がなされたと思われる。

外壁と3階の最重要室をそのまま残すことは、工事期間中の崩壊リスクも容易に想像でき、仮に、一旦崩壊した外壁や最重要室を原状復元することは不可能にちか。では、このようなリスクを負ってでも原状保存すべき

旧市庁舎の外壁と最重要室の建設からシンガポール独立までの歴史について触れたい。

(3) City Hall(1951年までは、Municipal Building:旧市庁舎)の歴史

1926年 英国植民政府の建築家F D Meadowsにより設計され着工した。特徴は、パダンに面するCity Hall Steps(正面階段)と一体感のあるコリント式の18本の巨大な柱を擁する荘厳な正面外装。3階に位置する最重要室であるCity Hall Chamber(当初はMunicipal Council chamber)はシンガポールの政策・発展を協議する会議や重要な式典会場として使用される。

1929年7月23日 Municipal Building(英国植民政府庁舎)として完成・開庁。

【写真④：旧市庁舎完成写真 出典：ARCHIPELAGO PRESS】



【写真⑤：旧市庁 3階最重要室 City Hall Chamber 保存再生前 出典：National Gallery Singapore】



1942年2月～日本軍占領下、日本軍及び昭南特別市市政府庁舎として使用される。

1943年7月5日 東條首相昭南特別市にてインド国民軍パレード観閲。

【写真⑥：日本占領下東條英機旧市庁舎からの観閲写真 出典：ARCHIPELAGO PRESS】



1945年12月12日 日本軍降伏調印が最重要室の City Hall Chamberで行われる。その後、再度、イギリス統治下となる。

【写真⑨：リークワンユー首相の宣誓（絵画） City Hall Chamber 出典：National Gallery Singapore】



1959年12月3日 City Hall Chamberにて、Yusof Bin Ishakが初代のHead of Stateに就任し、シンガポール国旗が正式に公開される。この日より、旧市庁舎に、首相府、国家開発省、文化省が設置される。

【写真⑦：日本軍降伏調印 旧市庁舎3階 City Hall Chamber 出典：ARCHIPELAGO PRESS】



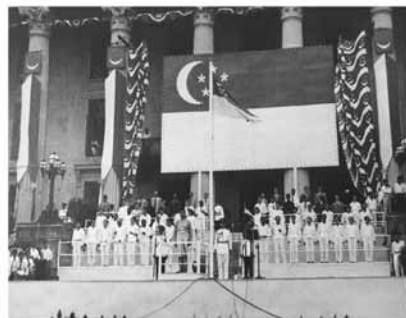
【写真⑧：日本軍降伏調印後の退去 City Hall Steps 出典：National Gallery Singapore】



1951年 シンガポールの市制に伴い、Municipal BuildingはCity Hallと改称される。

1959年6月5日シンガポールは英国の自治領(State of Singapore)となり、リークワンユー首相が最重要室の City Hall Chamberで宣誓を行う。

【写真⑩：シンガポール国旗の正式公開 City Hall Steps 出典：National Gallery Singapore】



1963年 マレーシア連邦として、英国から独立する。

【写真⑪：1963年9月 Malaysia Day Celebration City Hall Steps 出典：ARCHIPELAGO PRESS】



1965年8月9日 リークワンユー首相がCity Hall Stepsで、マレーシアから分離・独立を宣言する。

(4) 旧最高裁判所の歴史

1935年英国統治政府の建築家Frank Dorrington Wordにより設計された。

1937年工事着工。特徴は、旧市庁舎同様のネオクラシカル様式でデザインされ、構造は鉄骨造、上部には銅板を用いたドーム、正面入り口には、旧市役所の外装も手掛けたイタリア人彫刻家Cavaliere Rudolfo Nolliによる彫刻を配した。また当時は、世界恐慌の影響を受け建築コストを抑える様々な工夫がなされた。

1939年8月3日完成・開所

【写真12旧最高裁判所 出典 : National Gallery Singapore】



1942年2月頃～1945年8月頃まで、日本軍占領下、昭南特別市裁判所となる。

1945年9月 再び英国統治下の最高裁判所となる。

(5) シンガポールのアイデンティティとして

これらの歴史を顧みると、旧市役所ではシンガポールの歩みの中で重要かつ重大な宣誓・調印・国家儀式等が、重要室City Hall Chamberでなされ、荘厳な正面外壁を背景に、折々の時代を左右する重大なイベントがCity Hall Steps(正面階段)を歴史的舞台として行われてきた。

また、旧最高裁判所では、統治・占領下において、数々の判決がなされ、これに悲哀を禁じ得ない場面が数多く積み重ねられてきたと想像できる。

苦難の時代を経て、英国から独立し、さらにマレーシアから分離・独立し、類を見ない経済発展と社会の安定を果たしたシンガポール国民の様々な思いや願いが込められ、この国のアイデンティティともいえる建物ゆえ、外壁と旧市庁舎3階最重要室City Hall Chamberの原状保存の決定に至ったのだと思う。

「歴史的にシンガポール政府及び国民にとって思い

入れの深い国家遺産であり、本プロジェクトを日本の建設会社が施工する意義を感じ、日星外交関係も踏まえ、無事に竣工まで導いて欲しい。」

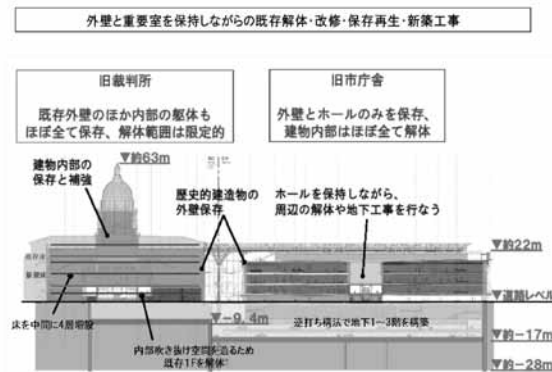
2011年に、鈴木前日本国特命全権大使が着工直後にプロジェクトの現地を視察された際、いただいたメッセージである。

3. 技術的に難易度の高い課題とその克服

前述のとおり旧市庁舎においては、外壁すべてと、3階最重要室City Hall Chamber とを空中に保持しながら、マリンクレーと呼ばれる超軟弱地盤のもとで、逆打ち工法(※注1)により地下構築、及び地上部既存建物内部解体・新築を行うという日本国内でも前例のない高難度の施工が求められた。

さらなる制約条件は、シビックエリアに建つこの建物は、4面が道路に接し、そのうち3面を国会議事堂、現最高裁判所、重要文化財であるSt. Andrews大聖堂に囲まれている。また、前面道路では毎年9月に、F1グランプリが開催され、その前後約3か月間アクセスが制限されるという外部制約条件があった。

【図①本プロジェクトの課題】



本誌読者の皆様は、建築に詳しい方は相対的に少ないと思われるので、少し乱暴な比喩と思われるが、誤解を恐れずに、料理に喩えてみる。

まずは、地下の地盤部分を非常に柔らかい豆腐とする。地上の旧市庁舎建物を冬瓜スープとする。冬瓜をくりぬき、薄皮一枚にして冬瓜の表面は傷つけてはならない。

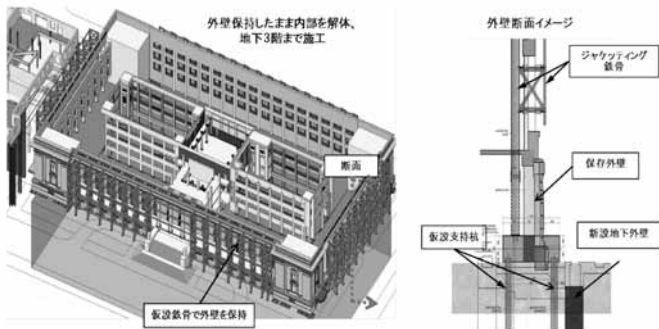
次に、冬瓜の底とその下の豆腐をくりぬき、豆腐の中に地下3階を構築する。

さらに、冬瓜スープの真ん中にある一部の具材(例えばホタテ)はその位置を変えてはならない。ホタテ以外の具材はすべて食して、冬瓜内に4階を構築し、その上部に5～6階を積み増す。このようなイメージである。

【図②本プロジェクトの課題を料理に喩えたイメージ】

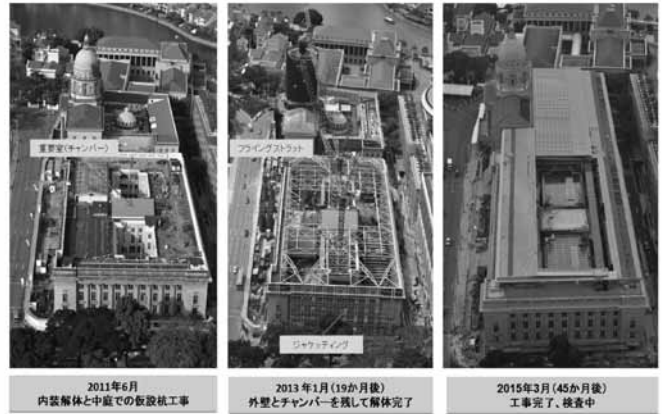


【図③本プロジェクトの課題の施工状況イメージ（計画段階）】



この外壁にダメージを与えずに、杭・RC連壁および内部躯体解体工事を行うために、日本の当社技術研究所の協力も得ながら外壁の鉛直保持、水平保持の対策(フライングストラット)を開発・実施した上で、既存躯体を切り出し、高さ24mの外壁と中庭の壁(全周400m)を、薄皮一枚の状態にした。その壁の真横で、構真柱の施工・RC連壁の施工(300パネル全周900m)を行い、その後、1階先行床に外壁を載せ替える工事を行った。

【図④最重要室を宙に浮かせたまま、外壁を薄皮一枚の実施工状況】

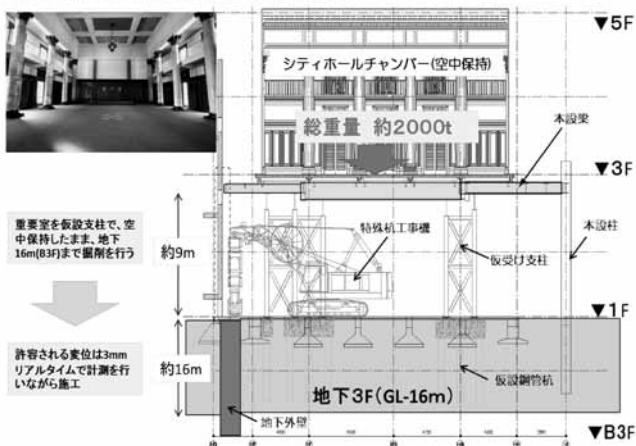


【写真⑤旧市庁舎外壁の実施工状況 壁・柱が浮いた状態】



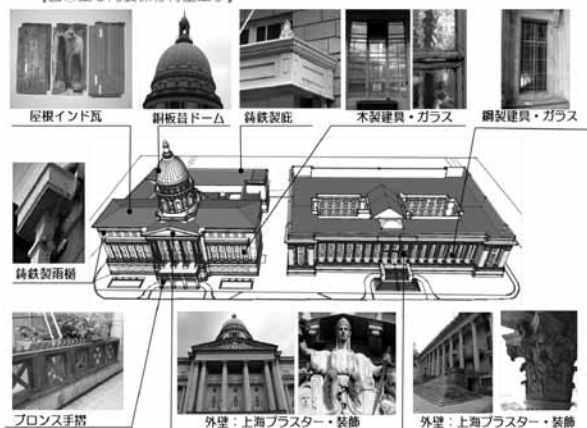
一方で、最重要室CHチャンバー(総重量2000t)は、プレロードをかけた鉄骨梁と仮設柱に、地上3階のレベルで載せ替え、1-2階の既存柱を切断し空中に浮かせた状態で、その真下で地下外壁の施工を行った。杭・地下外壁および掘削工事は、外壁・最重要室の変位を三次元でリアルタイムに測定をするという厳しい管理が求められる工事であったが、外壁保存と最重要室保持ともに、全てを管理許容値(外壁:面内方向 $\leq 5\text{mm}$ ・面外方向 $\leq 20\text{mm}$ / 最重要室:鉛直変位 $\leq 3\text{mm}$)以内で施工し、損傷ゼロで工事を進めることができた。

【図⑤最重要室を宙に浮かせる施工計画】

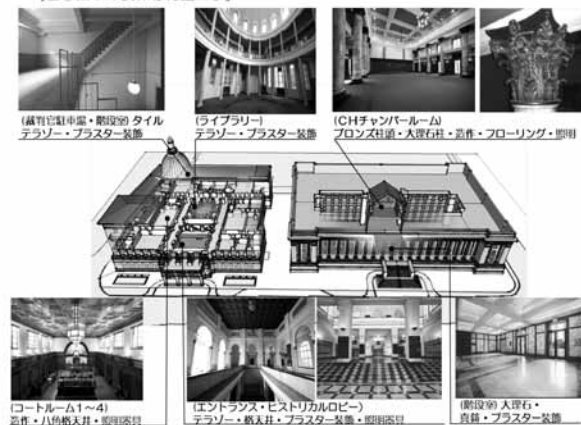


仕上工事においても、保存外壁のプラスター仕上げ、既存屋根瓦、テラゾー仕上げ壁・床、外装鋼製建具、木製建具、既存チーク造作天井・壁、銅板葺屋根、鑄造樋/手摺、彫刻など、実に多岐にわたるアイテムを保存再生することが課題であった。また品目によっては、保存に関する明確な指標がなく、建築主・設計事務所も保存再生の経験がない方もいた。このため、手探り状態の中、当社のこれまでの保存再生分野における経験(迎賓館・明治生命館・三菱一号館・横浜赤レンガ倉庫等)を活かし、損傷程度の見極め、補修・クリーニング方法、範囲の提案、試験施工の実施・承認など、保存局、建築主、設計事務所等関係者の合意形成を経て、築80年経たアイテムを見事に甦らせることに成功した。

【図⑥主な内装保存再生工事】



【図⑦主な外装保存再生工事】



4. GRAND OPENを迎えるにあたって

シンガポールの著しい発展の背景には、「建国の父」初代首相リークアンユ氏が掲げた長期的な都市計画があり、その計画には本プロジェクトのように歴史的建造物の価値をいかに高めるかを模索し、有効活用することも盛り込まれている。

2棟をつなぐツリー形状の柱に支えられたガラス屋根及びベールに、透かし細工を施したゴールドカラーのアルミパネルから差し込む光は、アトリウム・オープンテラスに注がれる。反射した光は優しい影を作り出し、新築部分と再生された保存部分をシームレスにつなぎ、建築主の求めた「歴史とモダンティーンを統合した独創的かつ多くの人を温かく迎える空間づくり」が実現されている。

そして、両建物は様々な歴史を経て、世界中の人々によるこびを与えることとなる。

写真⑭アトリウム・オープンテラス(完成時) 出典: National Gallery Singapore



本プロジェクトは建築遺産としても高く評価され、建築主、設計事務所と共に、シンガポールの建築保存再生分野で最も権威ある「URA Architectural Heritage Award Category A」を受賞することができた。

【写真⑤URA Architectural Heritage Award 2015 Category A】



建築主、設計事務所、コンサルタント、サブコン、サブライヤーとともに、幾多の困難を克服し、工事を無事完成に導いた、総括作業所長：泉秀紀氏、作業所長：高尾全氏をはじめ、本プロジェクトの全関係者に敬意を表したい。

2015年11月24日、グランドオープンを迎えるにあたり、読者の皆様には、8,000点を超えるシンガポール・東南アジアの19世紀～20世紀絵画・彫刻・写真・出版物等の展示・所蔵作品をご堪能いただきたい。

また、本プロジェクトに携わったすべての人々の建築作品としても、National Gallery Singaporeを鑑賞いただければ、幸いである。

(注1)逆打ち工法:1階の床を先に構築してから、地上と地下を同時に施工する施工方法

参考文献:

SINGAPORE A Pictorial History 1819-2000(Archipelago Press)
A History of Modern Singapore 1819-2005(National University of Singapore)
昭南特別市史(シンガポール市政会)
昭南島物語(上・下)(読売新聞社)
物語 シンガポールの歴史(中公新書)

参考情報:

National Gallery Singapore ホームページ
National Heritage Board ホームページ
The Japanese Occupation of Singapore, 1942-1945
(National Archives of Singapore, National Heritage Board)

執筆者氏名

吉田 光夫 (よしだ みつお)

経 歴

千葉大学 法政経学部(経営)及び、工学部(建築)卒業
1989年に株式会社竹中工務店入社以降、人事部、管理部(人事・総務・法務)、国内・海外プロジェクト、海外拠点運営を経験。駐在拠点は、マレーシア、台湾、シンガポール。現在はシンガポール事務所とアジア統括部を兼務。

アジア海賊対策地域協力協定情報センターと 最近のアジア周辺海域における海賊事案の発生状況について

ReCAAP Information Sharing Centre
Assistant Director (Programmes)

三嶋 舟司



皆さん、こんにちは。今年の4月からAssistant DirectorとしてReCAAP ISCで勤務している、三嶋と申します。「ReCAAP ISC」とは、何ですか？正直、読み方すら分かりません。」という読者の方がほとんどではないかと思しますので、まずは、私が勤務しているReCAAP ISCからご説明させていただきます。

1 ReCAAP ISCについて

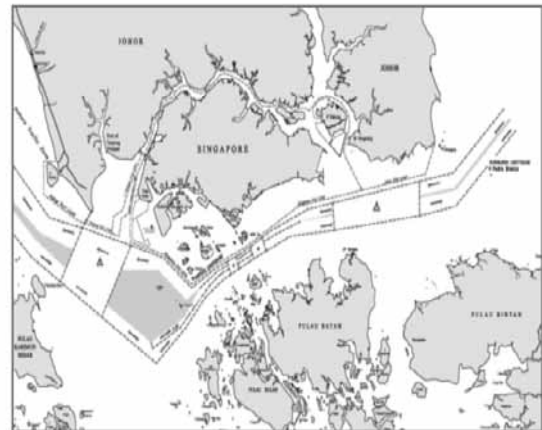
ReCAAP ISCの日本語名は、アジア海賊対策地域協力協定情報共有センターと言います。当センターは、アジア周辺海域における海賊事案に対応するために結ばれた地域協力協定に基づいて設立されました。この協定の正式名は「Regional Cooperation Agreement Combating Piracy and Armed Robbery Against Ship in Asia」と言います。この協定に基づいて設立された情報共有センターですので、これに「Information Sharing Center」を付け、更に全体名称の頭文字をとり「ReCAAP ISC」と呼んでいます。と、説明したいのですが、この説明は正確ではありません。お気付きかも知れませんが、「ReCAAP」の部分につきましては、上記正式名称の頭文字をとってもこのようにはなりません。恥ずかしながら私も最近知ったのですが、これは協定策定の初期段階において使われていた「Regional Cooperation Agreement Against Piracy」の頭文字を取って名付けたものを現在も使っています。読み方は、「リキャップ アイ・エス・シー」となります。



リキャップのロゴマークです。

(1) ReCAAP ISCの設立経緯

1990年代後半に、アジア海域、特にマラッカ・シンガポール海峡付近では海賊事案が多発しました。



同海峡は、資源・物質を海上輸送に頼る日本をはじめとしたアジア周辺諸国にとってはとても重要な海域ですので、いかにして輸送の安全を確保するかが大きな課題となりました。これらの海賊事案は、襲われた海域、船体の偽装が行われた海域や港、積荷をおろした港などが複数の海域や国にま

たがるが多く、また、被害船舶の所有者、運行者等も必ずしも同一の国に属しているわけではないことから、海賊事案の情報を関係国が共有し、対処していくことが重要となりました。

このような状況を背景に、2001年11月、小泉総理(当時)がASEAN+3(日本、中国、韓国)の会議において、アジアの海賊問題に有効に対処すべく地域協力の促進のための法的枠組みの作成を提案しました。この提案を受け、アセアン及び周辺国からなる作業部会が設置され、日本が主導する形で地域協力協定の作成作業が始まり、2004年11月に先ほど説明いたしました協定「Regional Cooperation Agreement Combating Piracy and Armed Robbery Against Ship in Asia」が採択され、2006年9月に発効し、そして、同年11月に「ReCAAP ISC」がシンガポールに設立、運用を開始しました。同協定発効時の協定加盟国は、フィリピン、シンガポール、タイ、ブルネイ、ベトナム、ラオス、ミャンマー、カンボジア、日本、中国、韓国、インド、スリランカ、バングラディシュの14か国でしたが、その後、順次加盟国が増え、現在では、ノルウェー、オランダ、デンマーク、英国、オーストラリア、米国が加わり、同協定に20ヶ国が加盟しています。

発効しました同協定の骨子を簡単に説明しますと、シンガポールに「ReCAAP ISC」を設置すること、「ReCAAP ISC」を通じた情報共有と協力体制(容疑者、被疑者及び被害船舶の発見、容疑者の逮捕、容疑船舶の拿捕、被害者の救助等の要請等)を構築すること、そして「ReCAAP ISC」を経由しない締約国同士の二国間協力を促進(犯罪人引渡し及び法律上の相互援助の円滑化、並びに能力の開発等)することとなっています。

(2) ReCAAP ISC の組織構成、活動等

ReCAAP ISCは、総務会と事務局で構成されています。日常業務は事務局が行い、これを総務会が監督するという形です。

総務会は、各締約国1名の代表者により構成されています。総務会は、少なくとも年1回、シンガポールで開催され、その年度のReCAAP ISCの活動報告、次年度の活動予定などについて議論がなされます。



事務局の長は、総務会で選出されます。事務局設置以来、日本人が事務局長を務めています。事務局長の下には、次長と4つの部及び広報・渉外担当があります。事務局長以外の職員は、地元シンガポール人が9名、そして加盟国から日本(小職)、中国、インド、韓国、フィリピン、タイの政府からそれぞれ1名が派遣されていますので、総員16名で運営されています。

4つの部があると説明いたしましたが、内訳は、運用部、分析部、計画部、総務部です。その役割ですが、まず、運用部は、海賊事案の情報をやり取りする部門です。我々は、情報共有の推進をはかるための組織ですので、現場に赴いて海賊を鎮圧したり、捜査する機関ではありません。それは、各国の主権に関わる事項ですので、日本で言えば海上保安庁になりますが、各国の関係機関が責任を持って全うすることになります。少し前述しましたが、海賊事案に適確に対処するためには、一国だけでは行い得ない要素が多数あるので、私たちReCAAP ISCが、加盟国の関係機関が捜索や捜査活動をただちに開始できるように、いち早く情報を伝達し、さらにそれらの活動によって得られた情報を共有し、また、必要に応じて、ある加盟国から別の加盟国への関連情報提供依頼や捜索活動の要請依頼を仲介するなどして、海賊事案の全容解明と早期解決に貢献しています。

続いて分析部です。分析部の主な業務は、ReCAAP ISCレポートの作成になります。レポートには、月刊、四半期、半年、年間の各定期レポートがあり、発生した海賊事案を報告するのみではなく、海事関係者の取る予防策や政府関係機関の活動に役立つように、発生海域や事案の特色や傾向等を分析した内容を掲載しています。これらのレポートの他にも、特質すべき事案があった場合は、特別報告をその都度必要に応じて作成しております。こ

これらのレポートは、ReCAAP ISCのホームページでご覧いただけます。



3つ目は、私が所属しています計画部です。計画部は加盟国の能力向上を図るための施策を推進する部門です。毎年、加盟国の海賊対策に従事する実務者を対象としたキャパシティビルディングワークショップを1回、加盟国の海賊対策に従事する実務者のトップが集まり、有効な海賊対策について話し合うシニアオフィサーズミーティングを1回開催しています。この他にも加盟国が開催するセミナー等へReCAAP ISCの職員を講師として派遣するなど、加盟国の能力向上施策の支援も行っています。

最後は、総務部と渉外・広報担当です。総務部は、予算管理、職員の福利厚生及び事務局スペースの管理などを担当しているほか、外国からの派遣員に対し、就労ビザやIDカードの取得等必要な支援を行っています。

2 最近のアジア周辺海域における海賊事案の発生状況

ここまでは、私が所属していますReCAAP ISCについて簡単にご紹介させていただきましたが、次はアジア周辺海域における海賊事案の現状についてご説明いたします。

(1)「海賊」について

「海賊」については、ここまで何も説明することなく進んできましたので、少し説明させていただきます

す。私たちは、いろいろなところで「海賊」という言葉に接してきました。歴史の教科書で学んだ「倭寇」や中世の瀬戸内海・西九州沿海を本拠にした「村上水軍」のような地方豪族であったり、映画「パイレーツ・オブ・カリビアン」のジャックス・パローも「海賊」ですし、アニメの世界のキャプテン・ハーロックも「宇宙海賊」です。その形態も、掠奪を繰り返す極悪非道な集団であったり、軍隊であったり、アニメのヒーローだったり様々で、大変守備範囲が広いのが「海賊」です。

では、「海賊」に関する情報の共有、提供等を業務とするReCAAP ISCが対象としている「海賊」とはどのようなもののでしょうか。先ほど説明しましたReCAAPの協定では「海賊」については、海に関する基本的な国際ルールとして知られている国連海洋法条約に規定する「海賊」と同様の定義を行っています。原文は、長くなりますので、ごく簡単に説明しますと、「海賊」とは、公海上における私有の船舶の乗組員等による私的目的のための不法な暴力、抑留又は略奪行為等をいいます。あくまで公海上での行為に限られますので、ReCAAPの協定では、各国の領海内で行われるものは、「船舶に対する武装強盗」として区別しています。区別する理由も簡単に説明しますと、公海は国家の主権が及ばない海域ですが、一方で領海は国家の主権が及ぶ海域ですので、法的な取扱いが違ってきます。しかし、実際に行われている行為そのものは、領海内と領海外でさほど変わりませんので、ここでは一様に「海賊」という言葉を使っています。

(2)海賊事案の発生状況について

では、アジアの海域でどのくらいの海賊事案が発生しているのかについて紹介いたします。ReCAAP ISCの集計によると、昨年は183件の海賊事案が発生しています。このうち、既遂事案が168件、未遂事案が15件となっています。この内、全体の62%は乗組員の所有物や船の予備品などを盗っていく「こそ泥」的な事案ですが、その他は最近大変問題となっているSiphoningと言われる事案等の重大事案が含まれています。

海賊事案の件数を過去5年間で見てみます

と、2010年は167件、2011年は157件、2012年は133件と減少傾向にありました。しかし、その後、2013年が150件、昨年が183件と増加傾向に転じています。最近の件数の増加は、Petty Theftと定義している「こそ泥」的な事案が増えていることによりますが、全体数からすると多くありませんが、Siphoning事案数が確実に増加しています。このSiphoningについては、最後に説明いたします。

続いて、過去5年間での海賊の発生地域について紹介いたします。

2010年から2013年の間は、インドネシアの港や錨泊地で発生した海賊事案の件数が増加していました。2013年には未遂も含めて90件の報告がありました。これは同年のReCAAP ISCへ報告された全体の件数が150件であったことを考えると、かなりの割合を占めています。そこでReCAAP ISCからインドネシアの港湾当局や法執行機関に対応を促したところ、インドネシア当局によるパトロールの強化などの取組みにより、2014年は件数が半減しています。

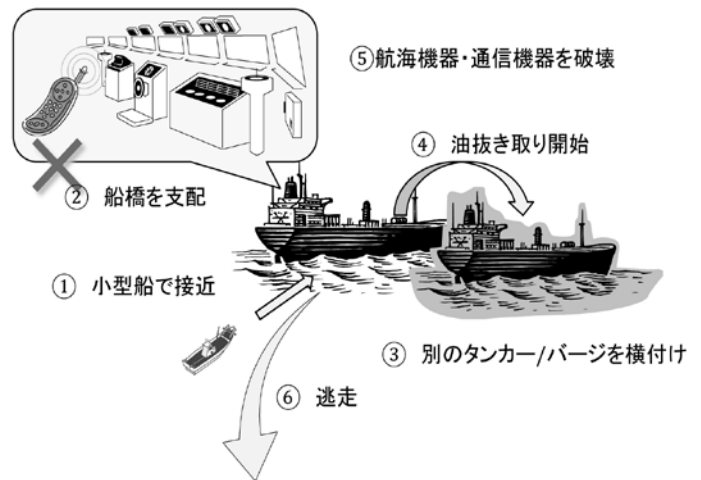
しかし、一方では、大変残念なことです。昨年の南シナ海とマラッカ・シンガポール海峡での海賊発生件数は、逆に増加しています。

ここで、6～7年前頃に大変な問題となったソマリア沖の海賊の現状についても少し触れておきたいと思えます。ソマリア沖の海賊は、アデン湾を通航する船舶をハイジャックし、身代金を要求するという形態でした。同海域もマラッカ・シンガポール海峡と同様に資源・物資の海上輸送にとって非常に重要な海域ですので、同海域が海賊の危険にさらされることは、世界経済に深刻な打撃を与えかねません。この為、現在、各国が協力して同海域に軍艦を派遣し、同海域の海賊の予防、鎮圧に取り組んでいます。日本においてもこれに対処するために新たな法律を作り、海上自衛隊の護衛艦に海上保安官を乗艦させ同海域に派遣しています。このような、日本を含めた世界各国の積極的な取り組みが功を奏し、現在、同海域の海賊は激減しています。

(3) Siphoningについて

最後に、最近、大変問題となっているSiphoning事案について説明いたします。Siphoning事案では、タンカーが被害船舶となります。タンカーといっても、原油を輸送している巨大タンカーではなく、ガソリン等の製油されたものを輸送するプロダクトタンカーが被害にあっています。

その手口をご紹介しますと、まず、海賊は小型ボートでプロダクトタンカーに接近し、乗り込みます。乗り込んだ後は、船橋を占拠し、乗組員を拘束、完全に船を支配します。すると、海賊が手配した別のタンカー、またはバージがやってきて、支配したタンカーに横付けし、同タンカーから輸送中のガソリン等の抜き取りを開始します。抜き取りが終わると、抜き取った側のタンカー、又はバージはどこかへ逃走し、更に、海賊達は支配下にあるタンカーの船橋内の航海計器や通信機器を破壊し、逃走するというのが基本的なパターンです。



これまでもSiphoning事案が無かった訳ではありませんが、その数は年間数件でした。ところが、昨年、急激に増加し、今年も半年間で昨年の件数に迫る勢いとなっています。

今年の6月に発生したSiphoning未遂事案を簡単にご紹介いたします。ある船会社から同社が運航するタンカーとの連絡が取れなくなったという情報がReCAAP ISCに入りました。ReCAAP ISCでは、締約国窓口に速やかに通報、関連する追加情報に

についても、その都度締約国窓口に通報し、情報の共有化を図りました。その後、哨戒中のオーストラリア当局の航空機がタンカーを発見し、マレーシア当局が乗り込んでタンカーと乗組員の安全を確保しました。マレーシア当局の調査の結果、Siphoningは行われていませんでしたが、オーストラリア当局の航空機が発見したときは、このタンカーは遊弋していたということです。油を抜き取り、輸送する為の別のタンカーが到着するのを待っていたのだろうと考えられています。また、逃走した海賊については、ベトナムのコストガードが逮捕しました。この他にも、インドネシア当局も巡視船を派遣したと聞いており、また、締約国窓口であるタイ海軍も艦船を派遣できるようスタンバイしていました。この事案では、情報を関係国で速やかに共有し、関係国が適切に対処したことで、Siphoningを防ぐことができた良い事例だと思います。

以上、取りとめも無く書いてしまいましたが、アジアにおける海賊の現状やReCAAPのことを少しでもご理解いただけましたでしょうか。

ReCAAP締約国とReCAAP ISCは、様々な「海賊」対策を行っています。私は4月に海上保安庁からReCAAP ISCに派遣され、まだまだ、アジア地域の海賊のことや、ReCAAPのことすら勉強中の身ですが、ReCAAPの様々な取り組みに、微力ながら貢献し、皆様のお役に立てるよう、これからも励みたいと思います。ありがとうございました。

執筆者氏名

三嶋 舟司（みしま しゅうじ）

進化する認証セキュリティ

ウェブサイトからヒト・モノ・カネを含むオンラインの世界

Cyber Secure Asia
Managing Director

宮本 繁人



1) 認証セキュリティの歴史とPKIの仕組み

インターネットの普及は社会をデジタル化しました。ビジネスでもプライベートでもインターネットの恩恵を受けない日はありません。しかし、一方で迷惑メールや情報漏洩といったデジタル社会ならではの弊害も生じています。認証セキュリティの歴史はインターネットの歴史と共に歩いてきました。PKIとは公開鍵に関連した技術のインフラであり、インターネットの安心・安全を確保するために考案された通信の暗号化と電子的な身分証明の仕組みです。電子証明書を用いることで、ネットワークを通じた顔の見えない相手でも、誰であるかをはっきりと確認することができます。また、公開鍵暗号という強力かつ利便性の高い暗号方式でインターネット上の通信を暗号化することができます。電子証明書も公開鍵暗号もPKI(公開鍵基盤)に含まれる技術です。

PKIは認証局(CA)、登録局、リポジトリなどから構成されています。認証局から発行される電子証明書は、取引相手が自ら提示する身分証明書のようなものです。認証局は安価なプロダクトで構築することも可能であるため、運用面も含めたセキュリティ対策が必須であり、認証局自体の信頼性を高め維持することが重要な意味を持ちます。発行された電子証明書に信頼性を持たせるためには、信頼のおける認証局から発行された電子証明書であることを明示的に利用者に伝える必要があります。

では実際に、この電子証明書を用いた電子商取引はどのように行われているのでしょうか。例えばAさんがインターネット上の店舗Bで買い物をす

るとします。Aさんは買い物の情報(データ)を入力しますが、この時、入力画面には店舗Bからの電子証明書が送られてきています。この店舗Bの電子証明書には送信するデータを暗号化するための鍵が含まれており、Aさんから送信されるデータはその鍵により暗号化され店舗Bに安全に送信されます。このデータは店舗Bに到達した時点で解読する必要がありますが、この時、店舗Bだけが持つ固有の鍵により解読(復号化)がなされず。つまり、電子商取引では鍵が2種類存在していることとなります。この2つの鍵を「鍵ペア」と呼んでいます。

Aさんに店舗Bから送られた鍵は、Aさんが店舗Bにデータを送信する際、暗号化するために必要な鍵です。店舗Bは多くのお客様に安全に買い物のデータを送信してもらうため、この鍵をなるべく広く配布する必要があります。この電子証明書を広く配布するための仕組みをリポジトリといい、この鍵を「公開鍵(Public Key)」といいます。

また、Aさんに渡した店舗Bの公開鍵により暗号化された買い物のデータは、店舗Bだけが復号できることで安全な取引が実現します。このため店舗Bだけが持つ固有の鍵を第三者に知られることなく安全に保持しておく必要があります。この鍵のことを「秘密鍵(Private Key)」といいます。この仕組みにより、例えAさんの送信した買い物データを第三者に見られることがあっても、店舗Bの秘密鍵がない限り、その内容を見られてしまうことがなくなるのです。

このように、1人のユーザー(ここでは店舗B)が1組の鍵ペア、すなわち「公開鍵」と「秘密鍵」を持つ電子認証の仕組みを、PKI(公開鍵暗号方

式)といいます。現実世界も含めて現在使われる鍵は、一つの鍵を秘密にする(暗号化する)方式でした。この「誰に知られても構わない」公開鍵の発明によってインターネット上での通信に革命が起き、クレジットカードによる注文などの取引が爆発的に普及しました。

2) SSL暗号化通信と最近のセキュリティ被害

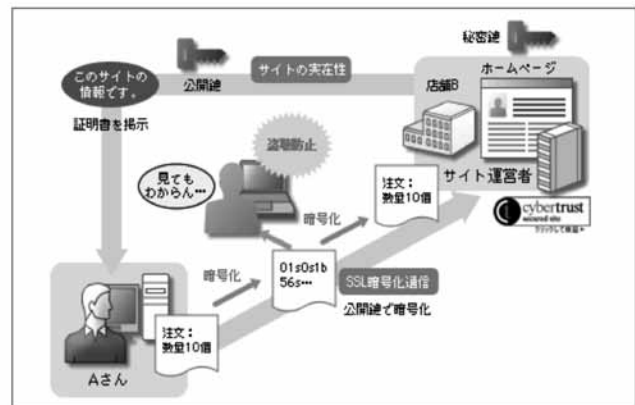
Eコマース(電子商取引)が日常的になった今日、便利さの反面、顔が見えない相手との取引に起因するリスクも同時に存在しています。取引情報を他人(第三者)が盗み見る「盗聴」、取引データ等の内容を書き換えてしまう「改ざん」、他人が当事者の振りをして取引を行う「なりすまし」、更にはこれら「改ざん」や「なりすまし」が生じたと思われる際に、「それは誰か他人が行ったものだ」と自らの商行為を否定する「否認」などが主なリスクとして挙げられます。

なりすまし	サイトの運営者や、関係者等相手になりすますこと。例えば、ECサイト運営者になりすまし、クレジットカードの番号や住所等の顧客情報を取得し、悪用されたりする。
改ざん	情報の送信元と送信先以外の第三者により、情報の内容を書き換えられること。ECサイトなどで、商品の注文数を書き換えられてしまう。
盗聴	情報の送信元と送信先以外の第三者により、情報を盗み見られること。ECサイト等で個人情報のやりとりを行っている際に盗聴されると、住所やクレジットカード番号等が漏れてしまう。
否認	否認とは、自分の行った行為を否定するということ。ECサイトが注文を受付けて商品を配送したのに、購入者が注文をしたことを否定したり、個数が違う等の主張をするといったこと。注文内容が間違いなくWebサイト経由で送られた保証がないと対処のしようがない。

このようなリスクを回避するために、Public Rootを保持した信頼される認証局(CA)が、情報通信先のサーバのサイト運営企業が実在していることを証明し、WebブラウザとWebサーバ間(サーバ同士でも可能)でSSL(Secure Socket Layer)暗号化通信を行うための電子証明書を発行しています。ユーザーは自分がアクセスしているサイト

のアドレスがhttp://からhttps://に変わり、鍵のマークが表示されることで電子証明書を確認できます。このしくみは上記で述べた公開鍵暗号技術を使用しており、次の二つを保証しています。

- 1) 暗号化通信: WebブラウザとWebサーバ間で暗号化通信を行い、個人情報、クレジットカード番号など第三者に盗み見られないようにする。
- 2) 実在証明: 公開鍵を持っている主体は実在するサイト運営企業であり、運営会社自身が所有するドメインを使用していることを認証局(CA)によって証明。



3) Web中心からクライアント認証、そしてIoT認証、ブロックチェーン認証へ

冒頭ご紹介しましたPKI技術ですがWeb Serverだけでなく、以前から企業のID入館証やPCのログイン方法としても使用されています。企業のバックオフィスシステムへのリモートアクセスの際にもユーザーログインとパスワードだけでは破られやすいセキュリティレベルを保管するための二要素認証として広く使用されています。ここ数年の傾向としてはスマートフォンの普及に伴い、PCと同等機能を持った携帯電話か

ら企業LAN内サーバーへのアクセス管理としてPKI技術を利用したクライアント認証が普及しています。情報漏洩の多くは外部だけでなく従業員に端を発した事件が多く、会社が管理する携帯電話のみからのアクセスを強化するために同一ユーザーであってもアクセス端末を特定する必要がありますからです。また、最近ではスマートネーション、IoT(Internet of Things)と呼ばれるように、車やドローン、家電や電気ガス水道など2020年には500億以上のありとあらゆるデバイスがオンラインに接続すると言われていています。IoT社会はデータ収集やリモート管理といった利便性をあたえてくれる一方、それら膨大な数の端末をどのように認証・管理し、悪意ある攻撃から防御または基幹システムへの踏み台として使用されないかというセキュリティ対策の必要性が今後更に高まってくると考えています。

ビットコインに代表される暗号通貨の仕組みでもPKIはビットコイン取引の際の電子署名のテクノロジーとして使われています。それに対して暗号通貨そのものの実在性に対してはブロックチェーンという仕組みによってコピーや改ざんを防ぐ手法がとられています。ブロックチェーンの仕組みの詳細に関しては良書がたくさん出ていますのでそちらに譲るとして、一言で役割を言いますと、現実世界では日本銀行などの各国の中央銀行がお金の信用保証を行っているのに対して、暗号通貨の世界ではこのブロックチェーンによって分散化された非集約型ネットワークにより取引履歴を各ノードで保管、照合しあい、複製や改ざんを防いでいます。暗号通貨は取引決済のコストの安さとスピードの速さから、既存通貨とのブリッジ通貨として現在多くの国で既に使われています。

お金の発行・管理・送金の分野でFintechによるイノベーションが今起きている中、私は前述した認証局(CA)が行っていた認証に関しても同じことが言えるとおもいます。中央集権的な認証方式はHSM鍵の保管、データセンターの管理、バックアップ、毎年受ける監査等コストが非常にかかります。また認証審査スピードもCAによって差があり数時間から数日と幅があります。さらにIoT社

会になり認証するデバイスや自動車、家電が爆発的に増えていく今後、限りあるCA認証局で審査・管理していくのは物理的、経済的にも困難になってきます。中央銀行と市中銀行が併せても世の中の全てのお金の流れを管理することが難しいように、IoT世代のオンラインデバイスへの認証に関しても、例えばブロックチェーンの仕組みに学ぶようなよりオープンで非中央集権的なネットワーク分散型の認証が求められていくのではないのでしょうか。それがより良いインターネット活用をみなが享受できる安全で便利な社会への貢献につながると私は考えています。

執筆者氏名

宮本 繁人 (みやもと しげと)

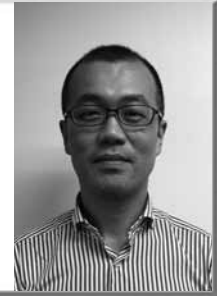
経 歴

1977年、東京都生まれ。2001年早稲田大学第一文学部卒業、2004年オーストラリア ビクトリア州ビクトリア大学修士課程卒業。外資系IT企業にて営業・マーケティング・企画などに携わり、現在はサイバートラスト株式会社海外事業部において海外事業を担当。昨年11月にCyber Secure Asia Pte Ltdをシンガポールにて登記致しました。

シンガポールにおけるM&Aについての考察

Amidas Partners Asia Pacific Pte Ltd
Director

伏田 浩俊



I. はじめに

ここ数年で、シンガポールをハブとしてASEAN進出を図る日本企業の数が増えており、シンガポールに地域統括会社を設立、またはシンガポール企業を買収して地域統括会社化する等の動きが活発になっている。日本企業によるシンガポール企業を買収件数は2014年には過去10年間で最多となったが、その背景にはシンガポール企業側の事情もある。シンガポール企業の約9割が地場資本の中小企業で、その多くが事業承継や事業上の課題を抱えており、その承継先・提携先として日本企業が有力な相手先として見られているのである。シンガポールにおける地域統括会社の必要性、シンガポール企業のM&Aマーケット状況、シンガポール企業を買収検討のポイント等について考えを共有させて頂きたいと思う。

II. シンガポールにおける地域統括会社の必要性

1. 地域統括会社の必要性

従来から地域統括会社として、香港と並び名前が挙がるシンガポールだが、中国への進出ハブである香港から、急速な経済成長を遂げているASEANへの進出ハブとしてシンガポールに再び脚光が当てられている。ASEAN経済共同体発足で域内の輸出入を自由化して、ヒト、モノ、カネが自由に行き交う単一市場が構築される中、従前の各地への個別進出から、ASEAN全域をひとつの経済圏としてとらえて、地域統括会社を利用して現場に近い場所で、全域の事業・投資の迅速で適切な意思決定、効率的な管理を行えるようにしていかなければならないと考える。

2. なぜシンガポールなのか

しかし、ASEANは単一のマーケットではなく、民族、宗教、法律、税制などが細分化されており、一元的な管理は容易ではない。ASEAN地域のなかでシンガポールは国際貿易港として発展する過程で多くの移民が流入し、多種多様な民族・言語・宗教を抱える国家として成長を続けてきた。自国の民族調和の取り組みを進めると同時に、自国の経済発展のための外国企業・外国人の積極的な受入施策も展開し、成功してきている。そのような歴史的背景を持つシンガポールは、日本企業がASEAN地域を統括していくうえで必要なリソース(人材、ネットワーク等)を確保できる国であり、地域統括会社を置くメリットが多い最適国であると考えられる。

- 1) 周辺諸国へのアクセスが容易な立地 (ASEAN・インドへのゲートウェイ)
- 2) 物流、輸送、通信等のインフラの整備
- 3) 政治・社会的な安定性
- 4) 外資参入の自由度が高い(外資規制はほとんど存在しない、会社設立が容易等)
- 5) 低い法人税率、優遇税制など税制上の恩恵が充実
- 6) 幅広いFTA、投資協定ネットワーク
- 7) 公用語が英語
- 8) 雇用者側に有利な労働法制
- 9) 教育水準の高い人材が豊富、外国人雇用が容易

また、ASEANで買収を積極的に進めていく場合には、シンガポールの地域統括会社を買収ヴィークルとして利用し、シンガポールを経由して他のASEAN諸国

への投資を行うことで、シンガポールの会社法上及び税務上の利点を享受することが可能となる。

III. シンガポール企業のM&A マーケット状況

1. 日本企業によるシンガポール企業の買収の狙い
シンガポールは日本企業がASEAN地域を統括していくうえで必要なリソース(人材、ネットワーク等)を確保できる国であるが、人材確保の難しさ等もありゼロベースから立ち上げるには時間を要する。また、既にASEAN各地へ個別進出をしている場合でも各地での事業拡大が進むにつれASEAN全域の事業を見据えた統括機能と事業基盤が必要、既にASEANに製造拠点を有しているが地場市場への参入や営業機能や周辺地域への物流機能などの強化が必要、などといった課題を抱えている日本企業も多い。そこで、それら課題を解決する方法として、ASEANへのネットワーク・事業基盤等を有しているシンガポール企業を買収し、地域統括会社として位置付けることが考えられる。

2. シンガポール企業の状況、売却検討に至る背景
シンガポールの企業数は189千社で、うち99%は中小企業、うち84%は地場資本であるが、多くの中小企業が世代交代に際しての事業承継問題を抱えている。地場銀

行が行ったアンケートでは、経営者の2人に1人が適切な事業承継者がいないと回答しており、過去に関与させて頂いたシンガポール企業の買収案件においても、承継者がいないことから売却検討に至ったケースが多い。また承継者がいる場合でも、事業を継げない(継ぎたくない)というケースも少なくない。この傾向は更に進んでいくと考えられ、事業承継型の案件はこれからも多く出てくるであろうと推察している。

また、2014年10月に公表された2,836社から回答(過去最多)のあったSME Development Surveyでは事業的な課題の回答として、事業的な懸念として競争激化(45%)、事業戦略としてビジネスモデルの見直し(51%)が回答されている。これには海外売上上の拡大(主要取引先国である中国やマレーシア以外のASEAN地域への進出)も含まれている。過去に関与させて頂いた案件においても、シンガポール国内のみならずASEANにおける事業成長のために、日本企業がもつ技術、ノウハウ、日本式経営手法、資金等を求めて売却検討に至ったケースも、事業承継型と同様に多い。日本企業との共同による競争力強化を目的とした案件も多く出てくるであろうと推察している。

3. ASEAN並びにシンガポール企業の買収状況
出典:SPEEDA(2015年の数値は1月~8月までの数値)

1) ASEANにおける買収件数の推移

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	合計
ASEAN	1,112	1,107	1,562	1,401	1,263	1,149	992	915	939	749	513	11,702
Singapore	328	387	457	365	337	386	312	269	299	309	211	3,660

(単位:件)

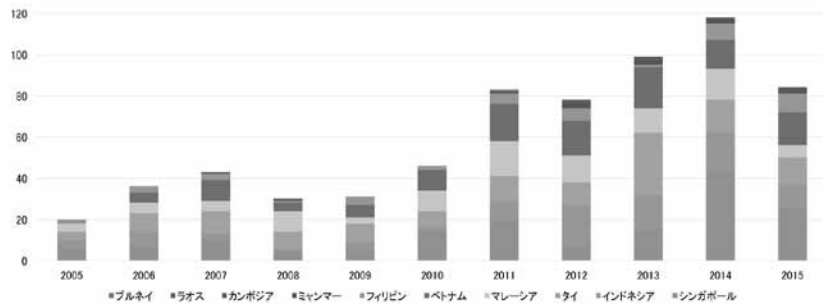
ASEAN												
買手国	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	合計
中国・香港	32	42	56	45	56	49	46	32	48	46	34	486
欧米	191	173	212	155	107	146	158	131	139	117	111	1,640
ASEAN	824	794	1,162	1,113	1,006	844	617	582	636	521	352	8,451
日本	20	36	43	30	31	46	83	78	99	118	84	668

Singapore												
買手国	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	合計
中国・香港	14	22	30	19	31	31	25	16	29	29	19	265
欧米	65	64	85	56	46	64	62	59	63	64	51	679
ASEAN	231	259	296	264	240	262	196	162	176	195	134	2,415
日本	6	7	10	5	5	14	19	7	15	43	26	157

2) 日本企業によるASEANの買収件数の推移

M&A件数

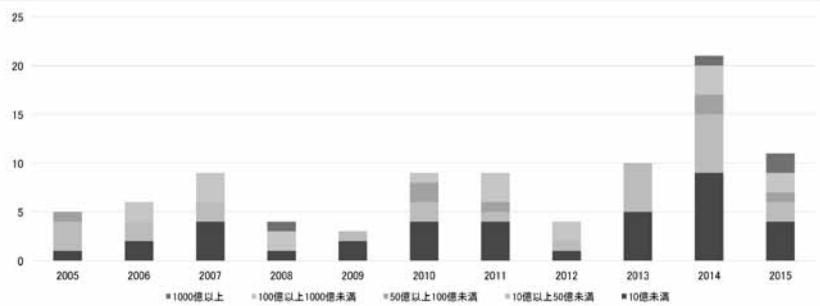
	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	合計
シンガポール	6	7	10	5	5	14	19	7	15	43	26	157
インドネシア	4	7	3	0	4	2	10	20	17	19	11	97
タイ	4	9	11	9	9	8	12	11	30	16	13	132
マレーシア	4	5	5	10	3	10	17	13	12	15	6	100
ベトナム	0	5	10	4	6	10	18	17	20	14	16	120
フィリピン	2	3	3	1	4	2	5	6	1	8	9	44
ミャンマー	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2	1	7
カンボジア	0	0	0	1	0	0	1	1	2	1	2	8
ラオス	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	2
ブルネイ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
合計	20	36	43	30	31	46	83	78	99	118	84	668



3) 日本企業によるシンガポールの買収件数
(案件規模別)の推移

M&A規模別件数/シンガポール

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	合計
全額	1	2	4	1	2	4	4	1	5	9	4	37
10億未満	3	2	2	0	1	2	1	1	5	6	2	25
10億以上50億未満	1	0	0	0	0	2	1	0	0	2	1	7
50億以上100億未満	0	2	3	2	0	1	3	2	0	3	2	18
100億以上1000億未満	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	4
1000億以上	1	1	1	1	2	5	9	3	4	22	15	64
公表なし	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2
解消	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	6	7	10	5	5	14	19	7	15	43	26	157



ASEANにおける日本企業による買収件数は2010年以降大きく増加傾向にある。特に日本企業によるシンガポールにおける買収件数は直近で倍増している。シンガポールにおける買収案件の特徴としては、シンガポール国内のマーケット規模が限られていることから企業規模が小さく(中堅企業で売上規模SGD30~50M程度、SGD100Mであれば比較的大企業の印象)、案件金額規模が50億円未満の案件が多い。過去に関与させて頂いた買収案件に

においても取引金額規模はSGD15M~100M程度が大半である。また、マーケットの規模が限られているがゆえにニッチな事業エリアで高いシェアを持っている、有利子負債が少ない等の財務的な健全性が高いなど、日本企業にとって検討しやすい中堅企業の案件が多いという印象である。

4. 売却候補先としての日本企業

2014年4月に外務省が実施したASEAN7カ国(インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナム、ミャンマー)における対日世論調査(香港企業への委託調査)によれば、日本企業の進出に対する好意的な回答は95%と高く、更に、米国、中国等主要11カ国の中で「最も信頼できる国」として日本を選択した割合は33%と第1位となった。ちなみに中国は5%(4位)、米国は16%(2位)である。また、ASEAN諸国にとって現在重要なパートナーはどの国かとの質問については11カ国中で日本(65%)、中国(48%)、米国(47%)の評価、将来重要なパートナーはどの国かとの質問については日本(60%)、中国(43%)、米国(40%)の評価であった。

感覚的であるが、シンガポールの人々は、欧米的な合理性・公平性を重んじる一方で、仁義、面子、繋がりなどもそれ以上に重んじている。故に、売却先の検討に際しては、価格等の経済的条件も重要視するが、社風・企業文化の尊重、ケミストリーの親和性、協議に際しての柔軟性・信頼性などが重要なポイントになっていると感じている。私が過去に関与させて頂いた案件においても、対象会社オーナー並びにアドバイザーは日本企業に対して「コミュニケーション(率直でオープンな議論)力の欠如」、「意思決定プロセスの遅さと不透明さ」などのネガティブ(不安)なイメージを持っている一方で、「誠実性、信頼性(約束を守る)」点について高く評価しており、有力な売却候補先として日本企業を検討したいというケースが非常に多い。

IV. シンガポール企業の買収検討のポイント

1. 制度等

制度等の観点からは、シンガポールは以下の点から他のASEAN諸国と比べ、買収の検討がし易いと考えられる。

- 1) 外資規制がほとんどない
- 2) 送金規制がない
- 3) 会社設立が容易(最低資本金SGD1、最低取締役数1名等)
- 4) 撤退が容易
- 5) 会社有利の雇用形態(解雇事由不要、労働組合不存在、退職金原則不要等)

- 6) 裁判・仲裁機関の信頼性が高い
- 7) 会社財務に関する信頼性が高い
- 8) 汚職等が少ない(清潔度指数は世界7位)

2. 案件情報の収集

案件情報はシンガポール地場の金融機関(銀行・証券会社)・監査法人・会計事務所・独立系M&Aアドバイザーファーム等が対象会社オーナー側のアドバイザーを務めていて、情報を持っているケースが多い。また、M&Aプロフェッショナルでなくても、多数の会社オーナーとの繋がりを保有していて、Introductionを中心として活動している個人も多い(これはIntroduction Fee(紹介料)という考え方が商習慣的に受け入れられていることもあるため)。(上記を総称して「ローカルファーム」という。)

最も留意しなければならないのが、ローカルファームと対象会社オーナーとのリレーション、つまり情報の信頼性である。理想的には、ローカルファームを通じて(または共同して)対象会社オーナーと直接のリレーションを構築し、売却検討に際しての背景や売却条件等を明確にするとともに、事業等の概要を正確に把握したうえで、日本企業側に提案できるようにすることである。この可否は、ローカルファームとの信頼関係によるものが大きく、過去に関与させて頂いた案件においても成約に至った大半の案件は、ローカルファームを通じて対象会社オーナーとの良好なリレーションが構築でき、ほぼ相対交渉で進めることができたものである。

3. 協議・交渉プロセス

協議・交渉プロセス自体は一般的な流れであるが、最も留意しなければならないのが、企業情報の収集の難しさと、そのための必要プロセスである。入札案件のような大規模案件であれば別だが、多くの中小規模案件では、日本でみられるようなNDA締結後に開示される初期的検討に必要な各種詳細情報をパッケージにした「案件概要書」が作成されていない場合も多い。勿論、情報開示のリクエストを行うが、まずは対象会社オーナーが情報開示の前に日本企業側経営陣とのFace to Faceミーティングを希望するケースが多い。これは対象会社オーナーが情報開示に関して非

常に慎重であり、日本企業とのケミストリー、関心度合いの高さを確認したいという考えからであり、日本企業にとっては物理的な難しさがあるものの、フレキシブルに対応していくスタンスが必須であると考え。入口の情報開示もそうであるが、案件の途中途中でも、協議事項が発生した場合には直接Face to Faceミーティングで解決していくという考えが基本である。協議・交渉を行っていくうえで非常に重要なベースとしては、リスペクトし、合理性・公平性を基本に据え、率直に議論することである。チキンレースにはせず、両者間にあるギャップをどのように埋められることができるのかを考えるのが肝要である。

4. ストラクチャー

詳細のシンガポールの会社法等に基づくストラクチャーに関する説明は割愛させて頂くが、通常は株式譲渡か事業譲渡の2つの主要方法が考えられる。事業譲渡は不要な事業(資産等)を承継せず、また簿外負債等のリスクを少なくできるため望ましい場合があるが、日本同様の煩雑さに加え、シンガポール特有の外国人の労働許可証の承継、不動産の賃貸借契約の承継(シンガポールは基本的に全ての土地を国が保有し一定期間賃貸借)等の手続きが煩雑でスケジュールのコントロールが難しいことに留意が必要である。株式譲渡は手続き的にも非常にシンプルであるが、Post-Merger Integration (PMI)を見据えた取得比率等の検討が必要である。一族経営の場合、社内求心力や外部とのリレーションを買収後にどのように維持・強化していくのが非常に重要になり、特に社内求心力(Key Personnelの雇用継続)維持は大変重要である。現オーナー(=経営陣)に高い意識とコミットメントで円滑な事業の承継に取り組んでもらえるようなストラクチャリングの検討が必要となるが、この場合、現オーナーに買収後も一定期間残ってもらえるように雇用契約(Service Agreement)を3年程度締結するケースが多く、あわせてマイノリティ株主として残ってもらい、当該残存株式分を雇用契約終了時点で業績に応じたインセンティブを付加した価格で買取るというストラクチャリングが考えられる。残存株式分の買取り時に価格等で紛争となるリスクを内包するが、買収計算式を詳細に規定する等でミニマイズすることも可能であると考え。また当該ス

キームは株式譲渡価格に乖離が生じた場合、残存比率を増やす等で将来的なインセンティブで乖離分を埋めるなどで解決できるスキームになる得ることもある。

5. 価格

価格評価の考え方・手法等について詳細は割愛させて頂くが、一般的なDCF、Multiple、時価純資産をベースに検討を行う。どちらかというとMultipleでの協議がなされることが多く、その場合、業種や個社別の状況もあり一概には言えないが、平均的には事業価値でEBITDAをベースに6~8倍という感覚である。また、シンガポールでも時価純資産という考え方が多く出ること多い。時価純資産については、国からの賃貸借している不動産があるが(基本的にシンガポールの土地は全て国が保有しており、使用に際しては国から一定期間(一般的に30年程度)賃貸借を受ける)、賃貸借でありながらその権利の売買は一般的で市場価格が形成されている。土地が限定的なことから全体的に高値となっており、市場価格にひきなおしたときの時価純資産がDCF等より高くなるケースもある。

V. おわりに

ASEAN進出・事業拡大を図る日本企業にとって、シンガポール企業の買収は非常に有効な戦略であると考え。シンガポール企業がもつ人材・事業基盤・ネットワークを通じてASEANへのリーチが可能となり、また地域統括会社として、ASEANにおける買収ヴィークルとして活用するなど、事業戦略の幅を拡大することができる。シンガポール企業側としても多くが事業承継や事業上の課題を抱えており、相互補完ができる可能性が高い日本企業への売却は有効な選択肢となり得る。

今でも多くの機会があり、今後も更に増えていくと考えているが、日本企業は慎重になりすぎて第一歩が踏み出せない、社内検討プロセスに時間を要することなどからその機会を逃していると感じることも多い。ぜひ、柔軟性とスピードと、障壁や困難を楽しむマインドと、人種・民族・言語・文化・宗教の壁を乗り越える強い信念を持って、積極的に機会を捕えに頑張って頂きたい。

い。今後も日本企業とシンガポール企業との提携が更に増え、ともにASEANで成長することを強く願っており、本稿がその一助になれば幸いである。

執筆者氏名

伏田 浩俊（ふしだ ひろとし）

経 歴

1996年に㈱三和銀行（現㈱三菱東京UFJ銀行）に入行。法人営業業務に従事。

2001年に㈱グローバル・マネジメント・ディレクションズ（現㈱KPMG FAS）に入社し、M&Aアドバイザー業務に従事。プロジェクトマネージャーとして大企業グループの再編案件などを担当。

2005年に㈱UFJ銀行（現㈱三菱東京UFJ銀行）に入行し、M&Aアドバイザー業務に従事。プロジェクトマネージャーとして大型再生案件などを担当。

2007年に独立系M&Aアドバイザー会社である㈱アマダスパートナーズに入社し、ディレクターとして国内の統合、買収、売却（事業承継、大手企業グループからのスピンアウト）、非上場化（MBO）、再生案件などを担当。2011年にクロスボーダーM&Aチームを立ち上げ。現在はAmidas Partners Asia Pacific Pte. LtdのDirectorとしてSingaporeに駐在。Singaporeを中心とした東南アジアのM&A案件（In-Out）の組成及びエクゼキューションに従事。

業界ぷらす1 エネルギー

一歩先を行くシンガポールのLNG拠点構想

TOKYO GAS ASIA PTE LTD
BUSINESS DEVELOPMENT MANAGER

山口 晋



はじめに

日本のLNG(Liquefied Natural Gas、液化天然ガス)消費量は、東日本大震災を契機とした発電燃料としての需要増加を受けて、ここ5年間で輸入額ベースで2.7倍に膨れ上がり、今や日本は世界一位のLNG消費国となった。

東南アジア諸国では、経済成長と人口増大によるエネルギー需要に対応するため、LNG輸入を推進する国が増えつつある。

シンガポールでは、ジュロン島にあるLNG受入基地が2013年に操業を開始しており、国内の発電所や工場へのガス供給等において、他の東南アジア諸国に先駆けてLNGの利用が進んでいる。また、政府主導のもと、LNGトレーディングハブ構想やLNGバンカリング等の先駆的な取り組みが始められており、アジア域内におけるLNG拠点を目指すシンガポールの構想が具現化しつつある。

本稿では、はじめにLNG(液化天然ガス)の基礎知識を紹介し、次に東南アジア諸国および日本のLNGを中心としたエネルギー状況をレビューする。最後にシンガポールが目指すLNG拠点構想について考察を進めていくことにする。

1. LNGの基礎知識

(1) 天然ガスとLNGの関係

LNGとは、液化天然ガス(Liquefied Natural Gas)の頭文字をとったものであり、地中ガス田から噴出してくる天然ガスを約-162℃まで冷却する

ことによって、液化したものである。液化することによって体積は600分の1まで縮小するため、生産国(オーストラリアやマレーシアなど)から消費国(日本や韓国など)へのLNG輸送船を使った大量輸送を可能に出来るメリットが生まれる。

一方で、生産国では天然ガスを液化するための液化プラントが、消費国では天然ガスを気化するための気化プラントが必要となるため、日本のような輸入国における天然ガス価格が諸外国に比べて高くなってしまおうというデメリットがある。

(2) 天然ガスが期待される理由

① クリーン性

メタン(CH₄)を主成分とする天然ガスは、他の化石燃料と比べて燃やした時の二酸化炭素(CO₂)排出量が少ない燃料である。さらに、大気汚染物質となる窒素酸化物(NO_x)の排出が少なく、硫黄酸化物(SO_x)も排出しない大変クリーンなエネルギーである。

表1 石炭を100とした場合の排出量比較

	天然ガス	石油	石炭
SO _x (硫黄酸化物)	0	70	100
NO _x (窒素酸化物)	40	70	100
CO ₂ (二酸化炭素)	60	80	100

出典:「エネルギー白書 2010」より作成

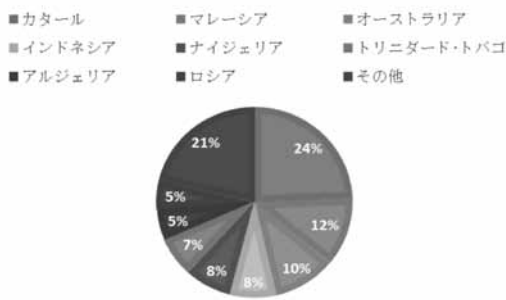
②安全性

天然ガスは、空気より軽い気体(対空気比重0.65)なので、空気より重いLPGや液体燃料のように地上に滞留せず、上方に拡散するため、爆発の危険が少なく、安全である。

③供給安定性

天然ガスは世界各地に豊富な埋蔵量が確認されている。LNG(液化天然ガス)として日本へは東南アジア・オセアニアを含む世界各地から輸出されており、供給安定性が高いといえる。加えて、近年の掘削技術の進展によって、シェールガスやコールベッドメタンなどの非在来型天然ガスが採取できるようになり、天然ガスの可採年数は飛躍的に伸びると言われている。

図1 世界のLNG輸出国

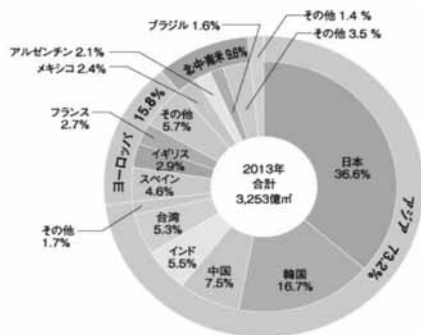


出典:BP Statistical Review of World Energy June 2014

(3) 日本の現状

2013年度世界のLNG(液化天然ガス)輸入量は、3,200億m³を超え、その約70%をアジア諸国が輸入しており、その中でも日本は全体の35%以上を占める、世界一のLNG輸入国となっている。

図2 国別のLNG輸入量



出典:東京ガス

2. 日本を含む東南アジア各国のエネルギー事情

東南アジア諸国は、引き続き高い経済成長率を維持し、経済発展を続けていくものと考えられる。とくに、インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ及びベトナムのASEAN5カ国の成長は、年毎に爬行性はあるものの底固く、とりわけインドネシア、フィリピンが高い成長を維持する見込みである。人口動態の面からも、15~64歳の生産年齢人口が15歳未満および65歳以上の人口の2倍以上となる人口ボーナス期を迎えている国々が東南アジア諸国には多くあり、こうした状態にある国は工業化による所得増や消費の活発化による高い経済成長を実現する潜在能力を有している。

表2 アジア主要国の経済成長率の推移

国(地域)	(単位%)											
	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	
日本	1.7	2.4	1.3	1.7	2.2	-1.0	-5.5	4.7	-0.5	1.8	1.6	
インドネシア	4.8	5.0	5.7	5.5	6.3	6.0	4.6	6.2	6.5	6.3	5.8	
シンガポール	4.6	9.2	7.4	8.9	9.0	1.9	-0.6	15.1	6.0	1.9	4.1	
タイ	7.2	6.3	4.2	4.9	5.4	1.7	-0.9	7.4	0.6	7.1	2.9	
フィリピン	5.0	6.7	4.8	5.2	6.6	4.2	1.1	7.6	3.6	6.8	7.2	
ベトナム	7.3	7.8	8.4	8.2	8.5	6.3	5.3	6.8	6.2	5.2	5.4	
マレーシア	5.8	6.8	5.3	5.6	6.3	4.8	-1.5	7.4	5.1	5.6	4.7	

出典:総務省統計局

こうした経済発展や人口増加にともなって、エネルギー需要も拡大していくため、2035年までに、東南アジア諸国のエネルギー需要は80%以上増加するものと見込まれている。石油、石炭の需要増もあるものの、とくに天然ガスの需要については80%以上増加し、2,500億m³に達すると推定されている。

表3 東南アジア主要国のエネルギー需要

	(単位: Mtoe)					2011-2035
	1990	2011	2020	2025	2035	
インドネシア	89	196	252	282	358	2.50%
マレーシア	21	74	96	106	128	2.30%
フィリピン	29	40	58	69	92	3.50%
タイ	42	118	151	168	206	2.30%
その他東南アジア	42	119	161	178	221	2.60%
東南アジア合計	223	549	718	804	1004	2.50%

出典: IEA

かつては資源輸出国であった東南アジア諸国も、旺盛な需要を背景として、石油輸入量の拡大や石炭・天然ガス輸出量の減少が進展し、資源輸入国となっている。こうした変化を背景として、東南アジア諸国ではLNG(液化天然ガス)の活用が注目を集めており、東南アジア域内では6か所のLNG受入基地が稼働中で、さらに7か所のLNG基地が建設中あるいは計画中である。

表4 東南アジア各国のLNG基地

既存基地

国名	基地名	能力(万t _油 /年)	開始年
タイ	Map Ta Phut	550	2011
インドネシア	西ジャワ(FSRU)	300	2012
インドネシア	Lampung(FSRU)	150	2014
インドネシア	アルン	150	2015
マレーシア	Melaka(FURU)	380	2013
シンガポール	ジュロン島	350	2013

計画中の基地

国名	基地名	能力(万t _油 /年)	開始年
マレーシア	Johor, Pengerang	500	2018
マレーシア	Lahad Datu	180	2019
インドネシア	中央ジャワ	300	NA
ベトナム	Thi Vai	100	2017
ベトナム	Son My	300	2018
フィリピン	Pagbilao	300	建設中
フィリピン	Bataan	NA	NA

出典: 東京ガス

日本はエネルギー資源の供給を海外からの輸入に依存しており、1970年代の二度の石油危機を契機に、エネルギー安定供給確保のため、LNG火力発電の導入や都市ガス原料の天然ガス転換等、エネルギー供給の多様化を進めてきた。日本のLNG輸入は1969年に始まったが、当初20万トン弱であった輸入量は、その10年後の1979年には1,485万トンとなり、現在は8,900万トン(2014年度)まで拡大している。

2003年に策定されたエネルギー基本計画において、天然ガスは中東以外の地域にも分散して存在し、相対的に環境負荷が少ないクリーンなエネルギーであることから、安定供給と環境問題の両面で重要なエネルギーと位置付けられ、都市ガス分野では天然ガスコージェネレーション・燃料電池等の分散型電源の導入促進等、天然ガスシフトの加速が盛り込まれた。このエネルギー基本計画は2007年に第二次計画、2010年に第三次計画、2014年に第四次計画が策定されている。

日本国内では34か所のLNG受入基地が稼働中であり、さらに6か所が建設中あるいは計画中であり、天然ガス利用は今後さらに進んでいくものと考えられる。

図3 日本のLNG基地



出典: 東京ガス

3. シンガポールのLNG拠点構想について

シンガポールはエネルギー輸入依存度の高い少資源国である。エネルギー輸入の内訳は、原油等が45Mtoe、石油製品が103.8Mtoe、天然ガスが10.3MtoeでそのうちLNGは2.3Mtoeとなっている。一方、エネルギー輸出については86.2Mtoeのうち85.5Mtoeが石油製品となっている。

表5 シンガポールのエネルギー輸入量

	単位: Mtoe										
	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	
総計	115.2	122.2	126.7	138.6	146.2	154.5	160.2	158.0	159.6	162.0	
原油	59.7	57.7	56.1	55.1	48.5	45.4	46.3	51.7	47.2	47.5	
石油製品	49.3	57.8	63.5	76.3	90.3	101.1	105.8	97.6	102.2	103.8	
重油	29.6	35.5	40.3	47.4	54.8	58.0	62.6	59.4	63.7	62.3	
軽油	4.0	6.3	6.4	9.1	15.1	17.5	17.6	14.6	12.9	14.3	
ガソリン	7.6	7.9	9.1	10.5	11.8	14.9	14.8	14.0	13.9	14.8	
ジェット燃料・灯油	2.2	2.4	2.8	3.5	3.1	3.6	2.2	1.6	1.7	2.0	
ナフサ	4.1	3.7	3.8	4.4	4.6	6.0	6.1	6.4	7.7	9.0	
その他石油製品	1.8	1.9	0.9	1.4	0.9	1.1	2.5	1.6	2.3	1.4	
天然ガス	6.2	6.7	7.1	7.3	7.4	8.0	8.1	8.8	9.9	10.3	
パイプライン天然ガス	6.2	6.7	7.1	7.3	7.4	8.0	8.1	8.8	8.8	8.1	
液化天然ガス (LNG)	-	-	-	-	-	-	-	-	1.0	2.3	

出典: Energy Market Authority

表6 シンガポールのエネルギー輸出量

	単位: Mtoe										
	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	
総計	64.4	67.3	72.2	79.6	84.0	88.9	94.2	84.5	84.8	86.2	
原油	0.8	0.8	0.7	0.8	0.8	0.8	0.7	0.8	0.7	0.7	
石油製品	63.6	66.5	71.5	78.8	83.2	88.1	93.5	83.7	84.2	85.5	

出典: Energy Market Authority

シンガポールのガス輸入については、1992年にマレーシアからパイプラインを敷設して火力発電所向けに供給を開始した。さらに、2000年代初頭にはインドネシアから海底パイプラインによるガス輸入を始め、ガス輸入量は急速に拡大していくこととなった。LNG輸入については、2003年頃から検討が始まり、2013年にシンガポール初となるLNGターミナルが稼動した。

LNG輸入は、ガスパイプラインへの過度の依存を避け、エネルギーセキュリティを向上させることを意図したものであるが、東南アジア域内でのLNG取引の拡大やスポット契約の活発化、船舶燃料利用(LNGバンカリング)等の取引の拡大をも見据え、シンガポールはアジアにおける天然ガス取引のハブとしての役割を果たすべく、LNGターミナルの拡張を計画している。

また、シンガポールは、市場重視の政府方針や輸送・販売事業の分離等、ガス事業制度・競争環境の面からLNGトレーディング拠点としての優位性を有している。

表7 活発な天然ガス市場形成に求められる要件の比較

	日本	韓国	中国	シンガポール
市場重視の政府の姿勢	—	—	—	○
輸送・販売活動の分離	—	—	—	○
卸売価格の自由化	○	—	△	○
充実した輸送ネットワークと非差別的取り扱い	—	—	—	○
競争を成立させる市場参加者の数	○	—	○	△
金融機関の参加	△	—	—	○

○・・・優位性あり

・・・現時点では優位性はない

△・・・現時点では不明

出典: IEA Developing a Natural Gas Trading hub in Asiaを元に作成

東南アジア域内の天然ガス取引量が増加していくことによって、その優位性をシンガポールは大いに発揮し、もともと政策実現力の高い国であることから、このハブ構想についても、実現時期が先になることはあるかもしれないが、着実に実行に移していくものと考えられる。

おわりに

東京ガスグループは、2015年4月に東南アジアにおける事業統括拠点として、シンガポールに東京ガスアジア社を設立した。同時に、インドネシア(ジャカルタ)、ベトナム(ハノイ)、タイ(バンコク)に駐在員事務所を開設した。20年以上前から活動を続けてきたマレーシア(クアラルンプール)を含め、これら5拠点を中心に、日本国内で130年にわたり培ってきたガスの利活用に関するノウハウの提供を通じて、域内のさらなる成長に貢献していきたいと考えている。

執筆者氏名

山口 晋 (やまぐち すずむ)

経歴

1983年、埼玉県生まれ。2010年LKY School 修了、2011年東京ガス入社、2015年 東京ガスアジア社へ出向

JCCI 9-10月イベント写真

9月23日 建設部会「オフィア複合施設新築工事」現場見学会



9月25日 観光・流通サービス部会 競馬場Turf Club視察会



10月2日 第1工業部会 懇親ゴルフ並びに懇親会



10月5日 10月度会員講演会
「アジア諸国への投資と環境・社会問題リスクへの対応」



10月2日 運輸・通信部会 & 第2工業部会共催
Singapore Maritime Gallery見学会



10月7日 10月度会員講演会
「世界初の高齢化対応都市構想—Aging city—」



10月13日 理事会



小西新会頭から大谷会頭へ
記念品の贈呈

TOSHIBA ASIA PACIFIC PTE LTD
土光 辰夫様 よりご挨拶

10月14日 三部会合同 パナソニック社屋内野菜工場見学会



第542回理事会 議事録

日時：2015年9月8日（火） 12：15～13：00

場所：日本人会 2階 ボールルーム

出席者：大谷会頭、小西、今枝、関、上田、村上副会頭、佐々木、岡田、大野運営担当理事、富田、湯口山下、高橋（正）、園部、筑本、高橋（健）、萩原、深谷、西田、加藤、白川、唐澤、松浦、鈴木、小澤理事、石井監事、堤、利光、長尾事務局長 計29名

大谷会頭が議長となって開会した。

議 事：

1. 前回（第541回）議事録承認

大谷会頭が前回（第541回）の議事録について諮ったところ、異議なく承認された。

2. 審議事項

（1）理事の帰国・異動等に伴う後任の選出について

工藤理事（パナソニックアジアパシフィック）の退任に伴う後任理事として、西田亨氏（同社）が着任することが諮られ、異議なく承認された。

（2）市川海老蔵・歌舞伎公演への後援名義付与について

長尾事務局長より、昨年に続き公演が決まった市川海老蔵の歌舞伎公演への、後援名義付与について要請があった旨、説明された。日本文化の普及にも繋がる点などが考慮され、理事会に諮られたところ、異議なく承認された。

（3）入退会について

長尾事務局長より、5法人会員、3個人会員の入会申請、3法人会員の退会申請があった旨説明され、諮られたところ異議なく承認された。これにより会員数は、法人会員739社、個人会員101名、計840会員となった。

3. 報告事項

（1）会頭報告、最近および今後の主要行事・会合について

大谷会頭から以下の事業、会合等の報告があった。

- ・7/20 NTUCの新事務局長との懇親昼食会があり今枝副会頭が参加。
- ・7/28 インドネシアのジョコウィ大統領との交流会があり、複数理事の参加。
- ・8/4 在シンガポールの経済団体によるSG50の記念式典が開催。
- ・8/21 FJCCIA総会ならびにASEANのミン総長との対話。
- ・8/23 アセアン経済大臣会合へのFJCCIA参加と要望の提出。
- ・8/26 インドネシア独立宣言70周年式典。

（2）部会・委員会からの報告

- ・募金委員長の稲垣副会頭が欠席のため、長尾事務局長より募金状況について報告された。
また、大谷会頭から、基金の剰余金に十分な額があることを鑑み、今後の募金活動の在り方について見直しを行うことが説明された。
- ・留学生委員長の小西副会頭より、8/28に留学生同窓会が開催され、過去の留学生が一同に会し、交流したことが報告された。

(3) 大使館なからの報告・連絡事項

- ・日本大使館の堤参与より、以下の報告があった。
- ・8/9にシンガポール建国記念式典があり、日本からは麻生副総理が出席した。麻生副総理が出席したことについてはシンガポール側の反応も大変良いものであった。
- ・外務省の海外「渡航情報」の名称が「海外安全情報」へわかりやすく変更となり、また、危険情報の4段階カテゴリー表記、説明が改められた。
- ・選挙について、在外選挙人登録は手続き2、3か月かかる。まとまった人数の登録希望者がいる場合、担当スタッフが各社に出張して登録手続きを行うサービスもあること、その利用を促す旨、説明された。
- ・大使館は9/11は休館となるが、11/23（月）は開館の予定。

以 上

シンガポール日本商工会議所基金「2013年度募金」より、奨学金を授与された2名の学生（NUSのジェニス・チンさんとNTUのリム・フイミンさん）がそれぞれ早稲田大学国際教養学部と立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部で1年間のコースを修了し、今年の8月に帰国しました。学生たちは会員の皆様に感謝の気持ちを込めてスタディーレポートを紹介したいとのことです。前号にはジェニスさんのスタディーレポートを掲載しましたので、今回はフイミンさんのレポートをご紹介します。

“My name is Huimin, returned scholar of JCCI Ritsumeikan Asia Pacific University (APU) Scholarship Program (September 2014 to July 2015). With a strong interest in Japanese traditional arts, I applied for this scholarship, went to Japan and joined APU’s Japanese Tea Ceremony Club, or *sadōbu* in Japanese. *Sadō* was my *ikigai* during my time in Japan, and since I have spent so much time on it, I decided to use it as a topic for my study report to share with all JCCI members. I hope you will enjoy my report and look forward to receiving any comments you have.



This report would not have been possible without the scholarship that JCCI Singapore has given me, and I am extremely grateful for that. Once again, I would like to thank JCCI Singapore for giving me this wonderful and precious opportunity to study in Japan.”

1 Introduction

In this chapter, I will describe the objectives and background of my research. Since the purpose of this report is to give an insight on what I have learned about Japanese culture, it is based on my personal experiences in Japan. Let me first explain why I chose Japanese tea ceremony (*sadō*) as my topic.

1.1 Research background

One of my intentions for applying for the JCCI Scholarship is to learn more about the traditional arts and culture Japan has to offer, particularly *sadō*. In my opinion, to fully understand a culture, one has to partake in a cultural art as ancient as Japanese tea ceremony. The many rules and traditions of what to say and do during the ceremony intrigues me, and furthermore, I would be able to pick up the language faster as practices have to be carried out in Japanese.

1.2 APU *sadōbu*

1.2.1 Structure of practices

One has to attend three practices before one can be considered as an official member of *sadōbu*. New official members receive a

sheet of paper with various mini-tests (*warikeiko*) they have to pass before they can proceed to be a tea-maker (*temae*). These tests include folding of a square cloth (*fukusa*), opening and closing the sliding doors of the Japanese room (*washitsu*), serving sweets and tea, and walking through the tatami floors. Even students who had *sadō* practice before entering the club has to go through this process. This is typical of many Japanese circles as I was told that Japanese clubs have very strict criteria to follow.

New members usually start by learning how to be a customer (*okyakusan*): how to drink tea, and how to appreciate the tea bowl (*chawan*) etc. They are paired with a senior student (*senpai*) for guidance and correction.

1.2.2 Events

Since April 2015, there have been a lot of events for *sadōbu*. In the past, there was an average of only one event every two months but in April 2015 alone there were four events held. All these events include tea ceremonies (*chakais*) for guests hosted by APU, and *sadō*-related activities in Oita Prefecture. So far, I had participated in six *chakais*¹ in 2015, including the *tanabata chakai* on 7 July. In mid-September 2015 there would be a cultural exchange to China which I would also be involved in.



Photo above: *Tanabata chakai* held in APU on 7 July 2015.

1.2.3 Number of students

Almost half of APU’s students are international students, and as a result, many circles also comprise of around 50% Japanese students and 50% international students, including *sadōbu*. As of June 2015, there were 52 official members in *sadōbu*, comprising of 17 Japanese students and 35 international students. In previous years, there were only around 20 members annually.

1.2.4 Hierarchy in *sadōbu*

As with all Japanese clubs and circles, there is a hierarchy in place. The committee consists of the president (*buchō*), the vice-president (*fukubuchō*), a treasurer and an assistant. During greetings to the *sensei*, they sit in a row to the left of the *sensei*, nearest to the door. The *senpais*, usually year four and year three students, sit to the right of the *sensei* in a row, near the decorative

¹ The six *chakais* I participated in were: the New Year *chakai* in February, *chakais* held for Hong Kong and Singapore students in April, an external *chakai* held in a local hotel, an event held in collaboration with the schools flower arrangement (*kado*) *sensei* to introduce Japanese culture, and the *tanabata chakai*.

alcove (*tokonoma*). Juniors (*kohais*) are to sit behind them. There are also specific rules on what kind of clothes we can wear during practices, amongst other restrictions. In such a strict, traditional club, why are there so many foreign students? My aim is to try to explore these questions:

1 Why are foreign students interested in *sadō*? Does it help them learn about Japanese traditional culture?

2 What is the difference in attitudes foreign students and Japanese students have towards *sadō*? Are there any difficulties foreign students faced?

3 What does *sadō* mean to foreign students?

1.3 Structure of the report

Chapter 2 describes the informants I have engaged in for this report, while chapter 3 focuses on *sadōbu*'s daily practice (*keiko*). I will be describing a typical day of *keiko* and my experience as a *temae*. Chapter 4 will explore the main focus of this report by discussing the attitude of foreign students towards *sadō* and differences they have compared to Japanese students. Chapter 5, the final chapter, will conclude this study.

2 Informants and data collection

The aim of my study is to examine the dynamics of foreign students during *sadō*. I tried to establish good relationships with some members of *sadōbu* so that I may observe them in more detail and hopefully get more truthful answers during interviews. This chapter describes the method of my data collection.

2.1 Informants

I attended *sadō* practice regularly since joining in November 2014 and have never missed a practice since. I met all my informants through APU *sadōbu*. In order to mingle with my informants I participated in all preparation and cleaning work before and after practices, in most events that the club is involved in, and also any extra activities such as drinking parties (*nomikais*) and karaoke sessions.

At the beginning of my exchange here, my Japanese was very bad and communication with Japanese students was a difficult task. Interaction with other foreign students was easy as most of them can speak English and were also more outgoing compared to Japanese students. There were only around four Japanese students, Haruka-Nishinaka, Yui, Kurumi and Sayaka, who were eager to interact with foreign students. Other Japanese students seem to have built a wall and it was difficult to break it down. In order to minimize this distance between Japanese students and me, I used my position as a foreigner to try to speak as casually to them as possible. As a foreigner, I am easily forgiven if I do not use the polite form. Furthermore, I join them for dinners before every practice in order to increase interaction. At the start I could not understand them but as my Japanese gradually improve I would try to talk to them, and as they grew to know me better they would sometimes attempt to translate to English so that I can be involved in the conversation. It was difficult to stick to the dinners as I always felt left out at the beginning but my efforts paid off. I also tried to host birthday parties for various members at my dorm and these gatherings help us know one another better.

2.2 Interviews

In June and July, I conducted interviews with some members, stating these questions:

1 Why did you join *sadōbu*?

2 Do you like it? Why? Which part do you like best? What is it that makes it so attractive?

3 How do you feel when you practice *sadō*? Do you feel comfortable?

4 What does *sadō* mean to you?

5 Did *sadō* help you know more about Japanese traditional culture and arts? How?

6 Do you plan to continue with *sadō* after returning to your home country/ graduation?

Informants can lie and there is no control we have over them, but I believe that I have built trust with my efforts to obtain friendly relationships. Having 10 months here to spend with my informants is critical as I would not have been able to fully observe my informants and gain access to their feelings otherwise.

3 Experience of *sadō*

In this chapter, I will focus on the description on APU *sadōbu*'s practice which is held every Tuesday and Thursday. I will also describe my experience as the *temae*, and have chosen the day when I had the test for my tea kettle (*bonryaku*) performance.

3.1 Preparation

The *washitsu* is opened from 12 noon for preparation. One of the *senpais*, Haruka-Kashima, told me that preparation is part of the study for *sadō*. "If we become the hostess next time, we have to prepare everything from scratch, like straining the powdered green tea (*matcha*) and preparing the utensils." Hence, learning preparation work is quintessential for students.

The tatami floors are first vacuumed. Then, we take out the tea scoop (*chashaku*) and start straining the *matcha* to make sure they are powdery and not clumpy. Straining of the *matcha* was the first preparation work that I learned, and I always enjoy doing it as I like the fragrance. After straining, we have to put the *matcha* into the tea container (*natsume*), and my *senpai* told me to shape it like a hill with a round top, so that when the *temae* opens the lid, it will remind the *temae* of the beauty of nature. It took me several months to learn the technique as I had always formed the *matcha* into a mountain shape with a sharp top instead. Meanwhile, other members will wash the tea bowls (*chawan*) and wastewater containers (*kensui*).



Photo above: The *matcha* in the *natsume*, created into a hill shape with round top.

The tatami rooms are divided into three sections, one with the *bonryaku*, and another with the brazier (*furo*). The last section will depend on the season: during the colder months from late autumn

to early spring, including the winter months, the sunken hearth (*ro*) will be used, while in the warmer season from late spring to early autumn, including summer, another *furo* will be used.

Preparation is usually done by 3pm, and students will then leave for other classes they have or stay in the *washitsu* for self-practice till about 6pm, for final preparations before practice starts proper.

3.2 Start

Practice usually runs from 6.30pm to 9pm, but students usually arrive at around 6.15pm before our *sensei*, *Ōga-sensei*, comes at 6.30pm.

We take off our coats and jackets before entering the classroom, so as not to bring outside dirt into the *washitsu*. The classroom consists of a small foyer, several more sliding doors where the tatami-laid rooms are, and another small preparation room (*mizuya*). Before the start of each practice, students will put on white socks and remove our jewellery. *Ōga-sensei* has taught me that wearing jewellery is not allowed in *sadō*. *Sadō* utensils are precious and by touching them when wearing jewelry may damage them.

Sadō kits are also very important. The basic kit includes a fan (*sensu*), a *fukusa* to purify utensils, a smaller square cloth (*kobukusa*) to protect utensils, and a special kind of paper (*kaishi*) used for the sweets. The club lends out *sensu*, *fukusa* and *kobukusa* for students to use at each practice, but students are highly encouraged to buy their own kits. At the beginning, I was contemplating on whether to buy them as they are quite expensive. Eventually I decided to get it and I felt great during each practice to use my own kit.

When *Ōga-sensei* enters, we stop chatting and everyone straightens their backs. All students sit in *seiza*-style, with the *sensu* in front of them, in the foyer while waiting for *Ōga-sensei* to remove her shoes and coat. She also passes the flowers for the day to one of the *senpais* to arrange and place in a vase. When *sensei* is done and moves into the *washitsu*, all students follow suit. Again, everyone sits in *seiza*-style with the *sensu* in front of them, and waits patiently while the *senpai* arranges the flowers for the day. During this time, *Ōga-sensei* will make small talk with the *senpais*, and the *kohais* will also chat with one another again. The practice starts officially when the *senpai* places the vase in the *tokonoma*, and everyone do a *goaisatsu* (greeting) with a formal bow.

3.3 Tea procedure

The day when I had my *bonryaku* test, I was assigned as the *temae* in the second round. Before every performance, the *temaes* have to greet the *sensei* individually. I did my usual *aisatsu*, "I will be taking the test today. *Yoroshiku onegaishimasu* (please show me your guidance)," I said.

Then *Ōga-sensei* said something about the kettle. As my Japanese was very poor, I did not fully understand and misunderstood the meaning, thinking that she was warning me to be careful as the kettle was hot. This was a major mistake on my part as I did not clarify. I said, "*Hai*," meaning "yes" in Japanese, and *Ōga-sensei* nodded, thinking that I understood. I kept my *sensu* and proceeded with preparing my utensils for my performance. I first selected a *chawan* I like, then placed folded a damp linen cloth (*chakin*) in the *chawan*, and picked my favourite tea whisk (*chasen*) and placed it on the *chakin*. I then put a *chashaku* on the *chawan*, and placed all of these, with the *natsume* in a tray (*obon*).



Photo above: The arrangement for *bonryaku temae*: *natsume* (top), *chasen* on top of the *chakin* in the *chawan*, and the *chashaku* on top of the *chawan*.

After making sure that the guests were served *okashi* and the sliding door closed, I then sat in front of the sliding door, took a deep breath, and slide open the door. "I will now make you a cup of tea," I said.

Then *Ōga-sensei* said something, which again I did not understand. Luckily, one of the *okyakusan* assigned to my section translated what *sensei* said to me, "You did not refill the kettle with water."

I looked into the kettle. The kettle was only half-filled as the previous *temae* had already used some. In the past, the water was always refilled by the *mizuya* helper. However, *Ōga-sensei* said that it is the *temae's* job to do so. I immediately apologized and proceeded to refill the kettle.

After refilling the kettle, I took a minute to calm myself down, and restarted the whole procedure. However, I was really nervous as it was a bad start to my test. I then decided that whether I pass or not, I will try my best to serve my *okyakusans* with the best spirit and make the tea to the best of my abilities, as always. With the burden of passing the test lifted, I finally managed to calm myself.

As I opened the sliding door and greeted my *okyakusans*, I stood up, making sure to enter with my right foot. I walked towards the *bonryaku* and kneeled down, placing my *obon* with the utensils in front of the *bonryaku*, stood up with my left foot first, and went out of the tatami room to take my *kensui*, making sure to keep my posture upright all the time. After folding the *fukusa* to clean the *usuki*, *chashaku* and *chawan*, I then invited my *okyakusan* to enjoy their *okashi* and proceeded to make the tea. This time, I had put too much water and was having difficulty creating foam. And finally, after my *okyakusans* finished their tea, I had to fold the *fukusa* again and this time, I did not fold it neatly, making the third mistake. As I ended my performance, I went to the *mizuya* with a heavy heart to clean my utensils, thinking that I have failed. My *senpais* comforted me, and reminded me to thank *Ōga-sensei* for her guidance. I went for another *aisatsu* with *Ōga-sensei* and to my surprise, I passed.

Ōga-sensei said that the most important thing for a *temae* is to show her sincerity when making tea for her guests. She could sense my sincerity and decided to give me a passing grade so I can

move on to the next level, which is the *temae* for *furo*. Perhaps Ōga-sensei knew that I will be leaving soon and thus was being kind to let me pass. Whichever the reason, I was very grateful.

3.4 Finishing

At around 8.30pm, students who are not *temaes* or *okyakusans* will start to wash and pack the remaining utensils not in used. The core members of *sadōbu* will then ask around to see who has not been the *okyakusan* for that day yet and thus, did not have the chance to drink tea and eat *okashi* yet. Those not assigned the role of *okyakusan* for the day will then gather and wait for the remaining *temaes* to finish, and enjoy the tea and *okashi* together. Ōga-sensei always joins in this last session too.

After making sure that everyone has drunk tea and ate the *okashi*, all students will then gather in the same style as the start of practice. *Buchō* will then thank everyone, and everyone will then give thanks together, saying "*arigatou gozaimashita*". *Buchō* will then reflect on that day's practice, give comments, or talk about any upcoming events if available. Afterwards, we all give thanks again, and follow Ōga-sensei to the door, and wait for her to put on her shoes and leave the room. Once again, we all give thanks and bow till she closes the door, and everyone will then shout "*otsukare sama!*" to give acknowledgement for the day's hard work.

4 Foreigners and their view on *sadō*

In this chapter, I will describe my study of Japanese and foreign students' views on *sadō*. This is based on my interviews with active members and observations of all members. All statistical information is accurate to the best of my knowledge as I submit this report in July 2015.

I have classified *sadōbu* members into three categories: very active members, who attend around 75% of practices and events, somewhat active members who come for around half of the practices, and non-active members who only attend around 25% of all practices. In my opinion, of the 52 members, 18 are very active, 10 are somewhat active, and 24 are inactive.

4.1 Foreign students in *sadōbu*

As mentioned in chapter one, in the spring semester of 2015 there were 35 foreign students in *sadōbu*. Of this, there were 8 active members and 5 somewhat active members, leaving a total of 22 inactive members. Members are not required to attend every practice, and some have no interest at all. As one inactive member K.Q. said to me, "I just want to eat sweets and drink tea, and practice my Japanese."

Another inactive member, L.P., also had the same intentions, "It is important to join a club in university for your resume. *Sadōbu* is one of the few clubs which you can choose to come only once a month as it is not demanding."

I believe many other inactive members have the same thoughts. However, the attitudes of international students in *sadōbu* are of two extreme ends. Those who are active come for every practice and put in a lot of effort to learn. Of year 4 students from October 2014 to July 2015 who were still in *sadōbu*, 2 out of 5 were international students: Felix from Indonesia, and Etsu from China. Felix, larly, has performed in many major events such as the Tenkusai festival in October 2014, while also involved in various other student organisations. He is also one of the few fast learners

who only started practicing *sadō* in university and yet climbed to such a high position in just four years. Both he and Etsu were highly respected in the club.

4.1.1 New foreign students

Since September 2014, there were 5 new foreign students who are extremely active in *sadōbu*. One of them was Soyeon, a Korean who managed to become a core member during the second semester of her first year, was the first foreign student who managed to do so during her freshman year. Another freshman that stands out was Teien from China, who was one of the first few international students to pass the *bonnyaku temae* test in her first semester, having only started *sadō* in university. It is obvious that she worked very hard to get to where she was and when asked why she puts in so much effort, she replied, "As you can see, many foreign students here do not take *sadō* seriously, and I feel that it's a stereotype that Japanese students have of us. That's why I have to work extra hard to prove that I am not like them, and that I am very interested to learn."

Indeed, many active international students, including myself, feel this way. In addition to the negative stereotype we face, we also cannot communicate with the *sensei* well, and have to rely heavily on *senpais* who can speak English to teach us. Foreign students do need to work extra hard to earn the approval of our *senpais*, by memorizing the steps well and by practicing on our own outside *keiko*.

4.1.2 A new era for APU *sadōbu*

The *buchō* from November 2014 to October 2015, Seunghui, is a Korean, and is also the first foreign student to become the president of APU *sadōbu*. Although armed with a perfect score in the Japanese Language Proficiency Test (JLPT) N1 level, as a foreigner he is not as well-versed as his Japanese counterparts in Japanese traditional culture, and has faced harsh criticisms from his *senpais*. "But I'm glad that my *senpais* are harsh on me. They did not treat me like an outsider just because I'm a foreigner. This shows that they really give their all in teaching me, and I am thankful for that," he commented.

As with Teien, he too, feels that foreigners have to work harder. His position as the first foreign leader also makes him want to do more to improve the club. 2015 is the year that *sadōbu* started writing post-event reflections for APU in order to secure more funding. This new trend definitely increased the workload for his core team and for future leaders of the club, but also allows the club to do more. The next *buchō* is back to a Japanese, but the new core members include Teien as the *fukubuchō*, and Leo, a Vietnamese as the assistant. With more international students joining the club, Seunghui feels the need for English speaking students to be part of the core team. I believe that this is a trend to continue in the future.

4.1.3 Foreign students' views on *sadō*

So what makes foreign students attracted to *sadō*? The responses I received varied. Seunghui answered, "I wanted to study about the *wa*, harmony in Japanese culture. This essence of *wa* is everywhere in *sadō* – when I step into the *washitsu* after a busy day in school, I immediately feel calm."

Felix commented, "I like the little details of *sadō*. as it requires me to be meticulous and suits my personality. The ve is the teaching of *ichgo ichie*, which means that eve is a

unique one. It makes me realise that every moment should be treasured, living in the now because this moment does not last for eternity."

Leo said, "I love looking at all the different *chawans*, and appreciating the beauty of the hanging scrolls and flower arrangement. Furthermore, it allows me to learn about Japanese culture and the great service they take pride in providing, as they called *omotenashi*."

Soyeon answered, "At first, I was interested because of the sweets and tea, but after joining, I fell in love with the *washitsu* and the etiquettes and respect between people when we practice *sadō*. It feels like meditation and I feel always feel calm when doing *sadō*."

From their similar answers, we can see that these students are truly interested in Japanese culture, and feel that they can learn about it in *sadō*. But do Japanese students feel the same way?

4.2 Japanese students and their attitudes towards *sadō*

Of the 17 Japanese students currently in *sadōbu*, 10 are very active and 5 are somewhat active, leaving only two inactive members. This includes Japanese students who had learned *sadō* before entering university, such as Noriko and Haruka-Kashima, and they have very high expectations of their juniors, being stricter than their peers. Most Japanese students in *sadōbu* are very passionate about their own culture, like Yuta, who is also in *kyudō* club, pointed out, "I didn't have the chance to learn about my own culture before university, so now I am grabbing every chance I have."

4.2.1 Japanese students' views on *sadō*

With so many other Japanese cultural clubs, what makes these Japanese students decide to join *sadōbu*? Yui said, "Actually, like Soyeon, I was first attracted to the sweets. But now, the most important reason I continued would be the philosophy of *sadō*: *wa*, *kei* (respect), *sei* (purity) and *jaku* (tranquility). Also, I want to meet people with the same interest in traditional arts as me. Practising *sadō* with my peers creates this special connection that cannot be found elsewhere.

Haruka-Kashima commented, "*Sadōbu* is the most traditional Japanese club, in my opinion, with the *washitsu* and kimono involved. I can also learn about Japanese traditional history as *sadō* is one of the oldest Japanese arts. Besides, *sadō* is good for mental health. That's why I continued from high school."

Takuto, one of the few guys in *sadōbu* who also started in high school, answered, "I love the spirit of hospitality in *sadō*, and how the host takes care of everything for the guest. This Japanese spirit can also be seen in many other Japanese arts but it's the most prominent in *sadō*."

Toko, a Japanese student who had studied in America for eight years, has a very unique identity, as international students consider her as Japanese but the Japanese do not consider her so. She said, "I have lived a long time in America, which made me realise how beautiful Japanese culture is. So I became interested in *sadō*, a typical Japanese tradition."

Like the foreign students, these Japanese students also agree that *sadō* is where you can learn about proper Japanese traditional arts. However, I feel that many of them, other than the active members, do not cherish their ability to understand Japanese and being able to get direct instructions from the *sensei* herself. There are many

Japanese who entered the club one semester before me and still has yet to master the *bonryaku* while I have already reached the second level of the *temae*, learning how to perform with the *furo*.

In short, although foreign and Japanese students join the club with different intentions, most of them feel that they can learn about Japanese traditional culture within *sadō*.

5 Conclusion

My study has attempted to explore the interests of foreign students in *sadō*, and compare them with Japanese students. As such I posed three questions and in this chapter, I will conclude my report by aiming to answer my last question: what does *sadō* mean to foreign students? I will first introduce the comments they provided and finally conclude with my thoughts on the future of APU *sadōbu*.

5.1 The meaning of *sadō*

Although everyone learns the same thing during *keiko*, what each person gets from it differs greatly. For Leo, *sadō* brings out a different side of him, "*Sadō* is a time when I can learn another side of myself; when I become calm and silent, it is very different from my outgoing personality. My friends were all shocked to learn that I like *sadō*."

For Seunghui, *sadō* is a never-ending learning process, "I'm always learning new things. It's difficult but interesting at the same time. I also have to learn about *kado* (flower arrangement) and calligraphy scrolls, which are all related. It's challenging to see how much I can memorise."

Felix feels that *sadō* is a reflection of one's mood, "Your physical and mental condition at the current state are reflected in each step you do during *sadō*. That's why it is important to calm down before any performance, and this allows me to relax and slow down, making me very comfortable during *sadō*."

Sadō is also a precious hobby for some people like Soyeon, "It is the most important part of my university life, and my life has been deeply enhanced by it."

Yui added, "*Sadō* is also something that enriches me. It is a place to socialize and learn new things as we exchange stories. I think *sadō* really means a lot to every one of us here."

Although answers are not the same, their opinions are similar. Many of them feel that *sadō* enhanced their lives. Learning this ancient art makes them feel sophisticated and that seems to be why *sadō* is so attractive. Like them, *sadō* has improved my life, and was my *ikigai*² during my one year here in Japan. Other than school work, I have dedicated my exchange life to *sadō*, and every moment spent was worth it.

5.2 Future of APU *sadōbu*

In this report, I described views of foreign students who are active members in *sadōbu*. However, there are many people who join the club without having an interest in *sadō*. This has caused many problems such as the lack of space for practicing, and increased noise which disrupts those who truly want to learn. Moreover, more clubs now require the use of the *washitsu* which puts

² A common Japanese term, meaning the reason of being; a joy of life

preparation work at risk. If these problems continue, I fear that the club would not be able to spread the art of *sadō* even if it intends to.

Should the above problems be managed, APU *sadōbu* would be one of the best channels to introduce *sadō* to the world. With more international students joining the club, and with the Japanese students and *Ōga-sensei's* continuous support, I definitely look forward to see how APU *sadōbu* moves toward in the future.



This photo was taken on the last day of my tea ceremony practice for keepsake.



Photo above: The Oita Godo chakai is held annually, with tea ceremony clubs from all over the prefecture coming together to prepare tea, welcoming over 700 guests in 2015.



*Photo above: Advancing to the next level of *sadō* after the *bonryaku* – the *furo*.*

《日本シンガポール協会よりお知らせです》

JCCI 派遣留学生 ジェニスさんに帰国前のご報告をいただきました

2014年9月に来日し、早稲田大学国際教養学部在籍していました、JCCI 派遣留学生・ジェニスさん (Ms. Janice CHEN) が、約10ヶ月の留学期間の終わるのを期に、7月24日 (金) 『ニュートーキョー田町店』で開催しました理事会にお迎えしました。ジェニスさんは、来日時より一段と日本語レベルを上げておられ、とても自然な日本語で一同歓談を楽しみました。

学校や寮での生活を通じて、いろいろな国からの留学生と交流ができたこと、国内旅行を通じて見聞を広めたことを語ってくれました。帰国前にはお会いできませんでしたが、大分県のAPU (立命館アジア太平洋大学) で同じく約10ヶ月の留学生活を送っていましたファイミンさん (Ms. LIM Hui Min) 共々、シンガポールと日本の架け橋になっていただけることを期待しています。

ジェニスさん
(テーブルの左側 前列)
を囲んで



はい、こちらは「日本シンガポール協会」です！

「日本シンガポール協会」は1971年の設立以来、「シンガポール日本商工会議所 (JCCI)」とも密接に連携し、日本とシンガポールとの経済協力、文化交流を深めるための活動をボランティア・ベースで行っています。シンガポールとの関係、交流を深めるため、ご帰国されましたら、あるいは今から協会の活動にご参加されませんか。ご入会を心からお待ちしております。連絡先は下記のとおりです。(2013年1月に、事務所は港区赤坂より港区芝に引っ越しました)



一般社団法人 日本シンガポール協会
〒108-0014 東京都港区芝 4-7-6 芝ビルディング 308
電話: 03-6435-3600 FAX: 03-6435-3602
E-mail: singaaso@singaaso.or.jp
ホームページ: <http://www.singaaso.or.jp/>

シンガポール日本商工会議所
事務局便り



《 9-10月 活動報告 》

建設部会「オフィア複合施設新築工事」現場見学会

9月23日に株式会社大林組の現地法人である大林シンガポール社が施行中のオフィア複合施設新築工事現場見学会を行いました。本プロジェクトは、ブキス地区において、事務所・ホテル棟、集合住宅棟および低層商業施設からなる複合建築を新築するものです。大林シンガポール社の素晴らしい段取りで、参加者の皆様には、とても有意義な見学会となりました。

観光・流通・サービス部会主催「競馬場Turf Club視察会」

観光・流通・サービス部会では、Singapore Turf Club見学会を開催いたしました。当日は朝からHaze値がうなぎ上りでしたが、レースが開かれる夜には好転、Turf Clubのご厚意により、通常では入場不可なオーナーズルームや法人ブースなどを見学すると共に、収益の用途などについてのレクチャーを受けました。

第1工業部会懇親ゴルフ並びに懇親会

10月2日、Sentosa Golf Club (Tanjong Course) にて懇親ゴルフ並びに夕食懇談会を開催致しました。当日は、ヘイズにも拘らず、無事に終えることができました。参加者は12名とやや少なかったのですが、終始和気藹々とした雰囲気、親睦を深めることができました。

《 2015年11月 行事予定 》

開催日	開催区分	イベント名	時間・場所
11月1日(日)		第27回(2015年)会員懇親ゴルフ大会	11:45~ Tanah Merah CC
11月3日(火)	委員会	11月広報委員会	12:30-14:00 Fourseasons Hotel
11月3日(火)	視察	第2工業部会 「シンガポール国立眼科センター」	14:00-17:00 シンガポール国立眼科センター
11月9日(月)	理事会	11月度運営担当理事会 第544回理事会	11:30-12:14 12:15-14:00 日本人会
11月18日(水)	部会 委員会	中小企業のための プレゼンテーション大会&懇親会	13:00-19:00 日本人会



月報

Nov, 2015



<編集後記>

(左：津田様、右：西野様)

今年はヘイズの期間がいつもより少し長く続いている中、家の中で過ごす時間が多くなっている方も多いのではないのでしょうか。早いもので1年も終わりに近づいており、このヘイズが季節の風物詩にならないように祈る所です。年末に近づく中で、年末の帰国のご予定などを立てている声をちらほら耳にし始めました。今年は皆様にとってどんな年だったのでしょうか？1年分の月報の表紙を見ると、自然とシンガポールでの1年が振り返れるような気がします。(西野)

訪日客の急増がニュースを賑わせていますが、それを裏付けるかのごとく、私のまわりにも12月に日本へ行く予定の同僚がたくさんいます。日本人ですら行った事がないような場所やレストランを探しだす彼らのアンテナとバイタリティには驚くばかりです。中にはリピーターも多く、滞在期間が2週間だとか、総勢10人での旅行だとか、「みんなで徹底的に日本を楽しもう」的なアプローチが増えているのはうれしい限りです。そんな彼らのキーワードは、「オンセン」。日々の会話の中でもこのキーワードが出ない日はありません。エアコンが効きすぎの寒いオフィスの部屋でオンセンにつかる自分を頭の片隅で想像しつつ、同僚とオンセン話に花が咲く南国ライフも楽しいものです。(津田)

シンガポール共和国は2015年8月9日に建国50周年を迎えました。今年は多くのシンガポール人にとって、50年の歴史を振り返り、そして50年先の未来に思いを馳せる、そんな年であったかと思えます。歴史の節目ともいうべきSG50の年にふさわしい読み物をはじめ、さまざまな業界における旬なシンガポール情報をご執筆くださった皆様に、この場をお借りして、心からお礼申し上げます。

<11月号担当 広報委員紹介>

【名前】 津田律子
【出身】 宮城県
【在星歴】 Since 1979
【会社名】 Drew & Napier LLC (法律事務所)
【仕事内容】
「コーポレートHQ」と「ジャパングデスク」の仕事を兼務しています。
日々チャレンジの連続です。
【趣味】 日本国内を旅行すること、歩くこと
【シンガポールのお気に入り】
マリナーベイ界隈、青空の日、さとうきびジュース
【月報読者の皆様へ】
シンガポールの紙面やニュースをにぎわすニュースに焦点をあて、シンガポールの「今」が反映された記事をご提供できるよう心がけています。ビジネス情報あり、テクノロジー情報あり、カルチャー情報あり、の月報をこれからもよろしくお願いたします。

【名前】 西野雄介
【出身】 大阪府
【在星歴】 Since 2011
【会社名】 en world Singapore Pte Ltd
【仕事内容】 管理職、マネージャー職以上に特化した人材紹介
【趣味】 ロードバイク
【シンガポールのお気に入り】 イーストコースト、ポートキー
【月報読者の皆様へ】
新しいもの、まだ多く知られていないけれども素晴らしい情報をより多く皆様にお届けできるように心がけています。何か面白いネタがあれば是非教えてください！



発行

JAPANESE CHAMBER OF COMMERCE & INDUSTRY, SINGAPORE
10 Shenton Way #12-04/05 MAS Building Singapore 079117
Tel: 6221-0541 Fax: 6225-6197
E-mail: info@jcci.org.sg
Web: <http://www.jcci.org.sg>

印刷

TOH-SHI PRINTING SINGAPORE PTE LTD
4 Ayer Rajah Crescent, Singapore 139960
Tel: 6775-2555 Fax: 6775-1661

.....

会員各位

シンガポール日本商工会議所
事務局長 長尾 健太郎

年末の事務局休館について（お知らせ）

拝啓 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、シンガポール日本商工会議所事務局は、
誠に勝手ながら下記の期間につきまして年末休館とさせていただきます。

休館中、会員の皆様にはご迷惑をおかけするかと存じますが、
何卒ご了承くださいますようお願い申し上げます。

敬具

記

年末休館： 12月28日（月）～1月1日（金）

（年末は12月24日（木）まで、新年は1月4日（月）より開館いたします。）

以上

シンガポール日本商工会議所
Japanese Chamber of Commerce & Industry, Singapore

10 Shenton Way, #12-04/05 MAS Building, Singapore 079117
Phone: 6221-0541 Fax: 6225-6197
E-mail: info@jcci.org.sg

.....

